８月

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2015年
8月号
No.626

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2014年
8月号
No.614

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2013年
8月号
No.602

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2018年
8月号
No.662

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2017年
8月号
No.650

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2016年
8月号
No.638

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2021年
8月号
No.698

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2020年
8月号
No.686

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2019年
8月号
No.674

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2023年
8月号
No.722

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2022年
8月号
No.710

いけばな

桑原専慶流

テキスト

2013年
8月号
No.602

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

玉川杜鵑草
唐糸草
山荷葉

〈表紙の花〉　仙溪

夏向きのさらりとした盛花。それぞれに名前に特徴があって面白い。

上中下と三層に分けていけることで、真ん中の唐糸草の花穂を印象的に見せている。

唐糸草は薔薇科・吾亦紅属の多年草で、紅紫色の繊細な糸に見えるのは雄しべで、まさに絹糸（唐糸）の束のようだ。日本の山野に生える。

その足元を隠すようにいけているのは実のなった山荷葉（さんかよう）である。目木（めぎ）科・山荷葉属の多年草で日本の中部以北の林床や沢に生える。荷葉とは蓮の葉のことで葉の形を蓮に見立てた名前。山荷葉の実は青紫色に熟すと甘酸っぱくて食べられる。

さて、それらの後ろに立つのは玉川杜鵑草（たまがわほととぎす）である。普通、杜鵑草は秋に咲くが、玉川杜鵑草は夏の花。花は黄色で北海道から九州の冷温帯域に分布する。

「玉川」とは京都府井出町の川の名前に由来する。玉川は奈良時代すでに山吹で有名で、玉川杜鵑草の花色が黄色であることから、山吹を連想させるので玉川の名前がつけられた。

「玉川」「山吹」で調べると、万葉集の撰者の一人、橘諸兄（たちばなのもろえ）が玉川付近に別荘を建て、庭に山吹を植えたとある。花の名前には文化の香りが残されている。

花材　玉川杜鵑草（百合科）
　　唐糸草（薔薇科）
　　山荷葉（目木科）
花器　陶花器

烏葉八角蓮

〈2頁の花〉　仙溪

八角蓮（はっかくれん）は目木科・ミヤオソウ属の多年草。中国中部から南東部と台湾に自生する。全草にポドフィラムというアルカロイドを含む有毒植物。中国では解毒剤として利用される。属は違うが表紙に使った山荷葉とは同じ目木科で、なんとなく姿も似ているが八角蓮の花は葉の下に咲くところが異なっている。

烏葉（からすば）八角蓮は鉢で買ってきて根洗いし、最初に器にとめてから他の花をいけている。珍しい形の葉が隠れないように気をつけた。茎の曲がった丘虎の尾を左後ろに伸ばして変化をつけている。

花材　烏葉八角蓮（目木科）
　　小鬼百合（こおにゆり）（百合科）
　　竜胆（りんどう）（竜胆科）
　　丘虎の尾（おかとらのお）（桜草科）
花器　青白磁水盤

段江浦草（だんつくも）　睡蓮（すいれん）

〈3頁の花〉　仙溪

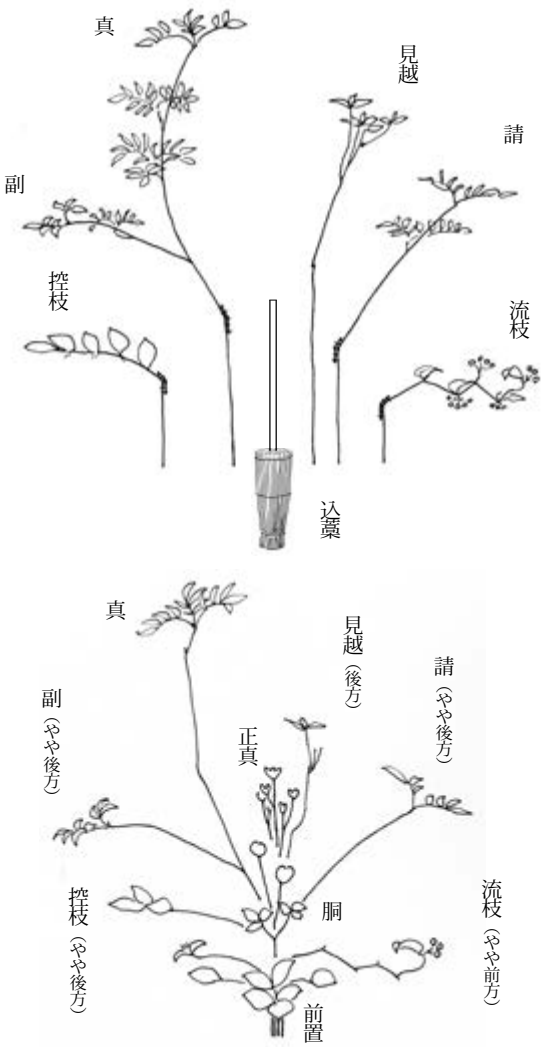
花型　株分け
主株　段江浦草（蚊帳吊草科）
子株　睡蓮（睡蓮科）
花器　陶水盤

水辺の株分け生花の作例。
主株の太藺は縞太藺（しまふとい）または段江浦草と呼ばれる斑入り品種で、太藺よりも丈は短いが清涼感がある。太藺は湿地や浅い池、沼、湖畔などに生育する多年草。長く伸びた花茎の先端に花序がつく。万葉集には大藺草（おおいぐさ）の名前で詠まれている。

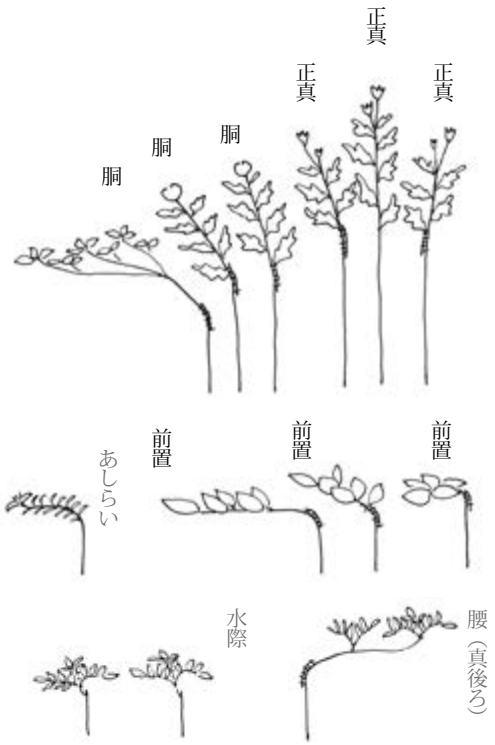
太藺の群落が風や水の動きにあわせて揺らぐ様子は風情がある。たっぷりの水をはった器にいけたい。作例では切り株を留にしている。

睡蓮は池や沼の水面に浮かぶように咲く多年草。若葉は巻葉の状態で水面から顔を出し、やがて広葉となるにつれて傾き倒れ、浮葉として成長する。日本には白花で小型のヒツジグサが自生し、花屋には外国種のものが切り花で出回る。水面上で生花のバランスに葉、巻葉、花を配置する。水面が小さいので花と巻葉を一本ずつにした。

立花の役枝　正面から見たところ（前後に出ているので実際の長さは絵よりも長い）



横から見たところ



花材
七竈（なながまど）（薔薇（ばら）科）
満天星（どうだんつつじ）（躑躅（つつじ）科）
山帰来（さんきらい）（百合科）
二輪菊（菊科）
菊（菊科）
鳴子百合（百合科）
姫百合（百合科）

花器
羽島焼花瓶

七竈真の立花

〈4頁の花〉　仙溪

夏の立花。作例の七竈はここ数年、初夏から出回るようになったもので、よくしまった葉が半分紅葉している。自然に紅葉した七竈ではすぐに葉がだめになるが、この枝は一週間以上元気だった。

父、仙齋が続けてきた立花研修会を、今は私が引き継いでいる。立花には立花特有の花材の扱い方があるが、私自身、その基礎が身についたと実感するまで何年もかかった。何でもそうだが、少しでも多くいける（立てる）以外に上達の近道はない。

町家に暮らすありがたさ

京の町家で暮らしていると、時折ありがたいなと思うことがあります。

30㍍もある長い石畳の路地に水を打つのは、小さな頃からの私の日課でした。ジョウロとバケツにたっぷりの水をくんで何度も往復します。お花のお弟子さんや客人のある時は、いつもこうやってお迎えするのですが、そのご褒美に爽やかな風が吹き抜けて行きます。それがとても気持ち良いのです。

それから3カ所ある水溜(みずたま)に季節の花を浮かべます。季節ごとに花の種類も変わりますが、今なら鉄線(てっせん)や紫陽花(あじさい)でしょうか。新しい水に入れ替えた水溜の浮かし花、暑さで元気がなくなっていても、もう一度生き返って目を楽しませてくれます。

中京区に住まいしているので、お隣も裏もマンションやホテルに囲まれてしまいました。小さな庭ですが、目隠しするように木々が青々と茂ってくれています。この美しい緑に清められた風が家の中を通り抜けて行くときには、この細長い町家の造りに感謝することも。

13歳で両親と離れ、この家で祖父母と共に暮らしてきました。お花の稽古を通して、物を大切に思う気持ちが何よりも強くなったと思います。

いけばなの家として毎日教室もあり、家族の生活もしています。家に来られた方にはお玄関の掛け花や床の間のいけばなを通して心地よい澄んだ空気を感じてもらいたいと思いますし、同時にそうすることが私自身のリフレッシュにもつながります。路地に水を打った時のように、気持ちがスーッとするのです。

花と共に生きた祖父や両親の大変さやしんどさを見て育ち、少しでも手助けになればとやってきたことも今では日常の何でもない習慣となり、これもまたご褒美なのだと受けとめています。

この家に住んで、家から学んだことも多くあります。

私にとって、いけばなは花との関わりを深めるだけでなく、暮らしそのものであるとも考えています。「家が傷んでくる前に早く気づいて直しなさい」は母の口癖でした。毎日の暮らしに余裕がないとなかなか気づけないので、今でも手強い言葉です。

父は大工さんと良く相談し家の修理をして、古い物と新しい物を調和させ、美意識の高い住みやすい家にしてくれました。この家を大切に美しく暮らし、守っていくことも大切な仕事だと思っています。(華道桑原専慶流副家元)

くわはら・さくらこ　京都市生まれ。甲南女子大仏文学科卒。江戸時代前期より続く桑原専慶流のいけばなを15世家元の夫と共に継承する。料理研究家としても活躍。

【京都新聞6月23日㈭朝刊1面　カラー掲載】

ビッグイシュー日本版「生き残りのしくみ」③

前号で「多様な子孫を残すことが植物にとっての生き残り戦略」と紹介したが、その逆を行くのが性質を画一化した栽培作物だという指摘もなされていた。作物の疫病が大飢饉をもたらした事例も多い。大規模農業への警鐘ととらえることもできる。植物が本来持っている生き残るための力を生かした多様な農業の価値を見直すべきではないだろうか。

再び「ビックイシュー日本版212号」より生物学者田中修氏による特集内容の紹介を続ける。

毒による独自の護身術

「季節感を出そうとアジサイの葉っぱを食べ物に添えた飲食店で食中毒事件が起きたり、フランスではキョウチクトウの枝でバーベキューをして死者が出たり、またスイセンの葉っぱはニラと似ているため誤って食べて食中毒をおこす事例もあります」

アジサイの葉には青酸を含む物質が、キョウチクトウにはオレアンドリン、スイセンにはリコリンという有毒物質が含まれる。

虫や動物たちに食べつくされないようにとそれぞれ独自の構造の毒（有毒物質）を持つようになった植物。まさに彼らは〝化学者〟だ。

そんな植物の毒を逆に利用する動物もいる。オーストラリアのコアラは、ユーカリの葉に含まれている青酸を無毒化する細菌を腸に棲まわせているので、ユーカリの葉をほぼ独占的に食べて生きていける。ただし生まれたばかりのコアラにはこの細菌はいないので、親の糞を食べて腸に細菌をとりこむ。

ヒトも植物の毒とは古より深く関わってきた。

江戸後期の外科医・華岡青洲は植物由来の有毒物質で全身麻酔をし、乳がんの手術を成功させたことで知られている。

ヒガンバナはよく墓地や田畑の畦道に植えられるが、これはヒガンバナに含まれる有毒物質リコリンによって、モグラやネズミを寄せつけなくするという先人の知恵。またヒガンバナの球根は水にさらして毒を抜けば食べられるので、作物の不作の年に飢えをしのぐ救荒植物としての役目もあった。

私たちは毒のある植物とともに生きる知恵を身につけた先人たちのおかげを多く受けている。

また野菜として出回っているものにも少なからず有毒物質は含まれている。例えばジャガイモの芽に含まれるソラニン、ギンナンのギンゴトキシン、モロヘイヤの種に含まれるストロフェチジンなど。果物の女王マンゴーは種の周りの果肉にあるマンゴールが皮膚をかぶれさせるので品良く食べよう。（次号へつづく）

直心道場（じきしんどうじょう）

今は掛けていないが、長い間、家の玄関の間には「直心道場」の書が額装で掛けられていた。昔の「テキスト」を見返していて、家元宅での師範認証式の写真に写っていたので思い出したわけだが、書の意味について調べてみた。

もともとは「直心是道場」からとられていると思われるが、これは維摩（ゆいま）経（きょう）というお経の中に出てくる言葉である。

昔、光厳童子が毘耶離の城門を出て、閑寂の境に修行の道場を求めようとしていたとき、維摩居士（ゆいまこじ）が城に入って来るのに出会った。光厳童子が「どこからお帰りになられたのですか」と尋ねると、居士は「今、道場から帰るところです」とのこと、そこで「実は私は閑寂な道場を探しているのですが、居士が行かれた道場はどこにあるのですか、ぜひ教えてください」という問いに「道場は外に求むるに及ばぬ。直心是道場、虚仮（こけ）なきが故に」と喝破されたという。

「素直な心に偽りはない、そこにこそ道場はある」と言い換えることができると思うが、師匠も弟子も、この「素直な心」についてよくよく考えて稽古するならば、おのずといけばなの心に近づけるのではないかと思う。さて、「花をいける素直な心」とは。自問自答中。

三種の花で

〈9頁の花〉　櫻子

アンスリウムと薔薇は一本ずつ、オンシジウムは二本使っていけてみた。少ない数ほどまとめにくい。

薔薇一輪の葉を二段に分けて水際をきれいにみせる。薔薇を買う時は茎が太くて葉の生き生きしたものを選んでいる。日持ちの良いアンスリウムとオンシジウムも艶やかな薔薇の葉のお陰で元気に咲き誇る。

壊れそうなほどに薄く焼かれた白磁の花器。口元に繊細な絵付がされている。アクリル製の花台。

特別な花として飾りたい。

涼しげに

〈10頁の花〉　仙溪

「実の汁が服についたらとれない」雑草として子供の頃から知っていたが、近頃は実の青いうちに切り花で出回るようになった洋種山牛蒡（ようしゅやまごぼう）。枝先には花から実になる過程も見ることができ、器にいけると野外で見るよりも涼しげに見えていい感じである。

ただし有毒植物なので、決して実を食べないように。特に幼児の手の届くところにはいけておかないほうがいい。

洋種山牛蒡はアメリカヤマゴボウとも呼ばれるように、北アメリカ原産の多年草（山牛蒡科）。久留米鶏頭と桔梗をとり合わせて、スウェーデンのガラス花器にアクリルの仕掛けをして剣山でいけた。

蒲（がま）の穂

櫻子

日本全土の池や沼に生息し夏に花を咲かせる蒲の穂。自然に生えているのを見ても美しいとは思わないが、水をたっぷり張った水盤にいけるととても涼しげな花となる。

雄花は黄色い花粉となって飛んでしまうので、雌花だけを残していける。昔は因幡の白うさぎの話をしながら雄花穂を取ったが、最近の蒲は雄花穂が綺麗に取り去られている。さらに雌花穂の上の軸が切られていることもある。

今年の夏の稽古は雄花穂を観察したいからと、産地に連絡してもらい自然のままの蒲の穂をいける事ができた。

考えてみれば、日本神話に登場する蒲は１３００年以上前から生息しているのだ。（古事記の成立は７１２年）そんな植物をいけばなでは大切にいけている。

蒲と小蒲は、上の雄花穂と下の雌花穂がくっついているが、姫蒲は雄花穂と雌花穂が離れて付いている。きちんと距離を置いているのだ。

昔の人は良く観察して名前をつけている。

花材　蒲（蒲科）
　　オンシジューム（蘭科）
　　紫陽花（紫陽花科）
花器　ガラス鉢

桑原専慶流いけばなテキスト602号
2013年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五二五円　http://www.kuwaharasenkei.com

バターのお店

櫻子

フランスの伝統発酵バター「エシレ」のクッキーを頂いた。

京都では買えない珍しいお菓子。箱があまりにきれいなので、おとしを入れてカラーとカラジウムをいけた。

もったいないからと仕舞い込んでしまえば、そのまま忘れてしまうだろうし、捨てるのも耐え難い、花をいけることで、心に留める事になる。

「軽やかなゆきずりの意匠花」と表現したのは祖父だった。

1973年のテキストに「アダム&イブ」のショッピングバックにフリージアをいけていた。この店はたち吉の洋食器部門で、最初京都にオープンした時は、憧れのショップだった。まだ外国からの洋食器が少ない時代、花を飾りテーブルセッティングしてのディスプレイは珍しかった。

祖父の時代も今も変わらない。京都人は特に新しい物が好きだが、祖父も私も同じだ。

私の頼りない文章に十三世専溪の言葉を。

「この様な意匠花も繰り返せば鼻につく。が、こんな瞬間的な思いつきはいけばなのある部分にはいつも必要とされている。こんな風に利用することも考えるといけばなも又楽しということになります。」

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
8月号
No.614

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

大切なことは？

仙溪

宮城県の海岸には大きな黒い袋が整然と積まれていた。袋の中は震災がれき、いや津波でグチャグチャにされた大切なものたち。土地の人はどんな思いで見ているのだろう。愛しい過去の思い出。忌まわしい理不尽な体験。

黒い袋の中には悲しみが詰まっている。自然災害がもたらしたもの。その上に私たちが生んでしまった核汚染が追い打ちをかける。過ちと真剣に向き合わないといけない。つくってしまった過ち。使い続けた過ち。無関心の過ち。騙し騙されてきた過ち。

「放出された放射性物質は大変危険です。原子力政策はまちがっていました」と、いつか軌道修正してくれるだろうなどと思うのは間違いだった。他人任せではだめだ。日本の、地球の行く末は、一人一人がどんな生き方をするかにかかっている。

自分では何も生み出さず、消費することだけに熱心な人たちがいる一方で、純粋に、誠実に、自然の恵みに感謝して今を生きる人たちがいる。地に足をつけて、先人の教えのもとに、信じる道を進む人たち。そんな人の言葉に目を覚まさせられる。教わる、育てる、楽しむ。豊かな心を得るヒントは、自然と共に生きてきた先人の知恵の中にこそあると思う。

私たち一人一人が生き方を見つめなおす時なのかもしれない。日々の暮らしの中で自然の命をどれだけ感じているだろうか。「ほんとうに大切なことは?」

サラセニア　〈表紙の花〉　櫻子

サラセニアは、長い筒状の葉で虫を捕らえる、いわゆる食虫植物だ。北アメリカ東部からカナダの湿地に分布する。

珍しく切り花でサラセニアが売られていた。筒と蓋の部分にある赤い網目模様が綺麗だったので、それが目だつようなとり合わせにした。

花材　サラセニア（サラセニア科）
　　アンスリウム（里芋科）
　　スモークグラス（稲科）
花器　赤黒ガラス花器

アーティチョーク　〈2頁の花〉　仙溪

アーティチョークは地中海沿岸原産の多年草で、西洋では若い蕾が食用として売られている。

重量感のある、鮮やかな赤紫色の花はたとえ一輪でも存在感がある。ガラス器の中にガラスのコップを沈めた上に剣山を置いていけた。

花材　アーティチョーク（菊科）
　　カラー（里芋科）
　　カラジウム（里芋科）
花器　カットガラス花瓶

タニワタリノキ　〈3頁の花〉　櫻子

谷渡の木は茜科の常緑小高木。日本の九州中部以南から中国、東南アジアまで分布する。球形の花が愛らしく、鉢植や切り花でもお目にかかるようになってきた。

作例の枝はアメリカタニワタリのようだ。こちらは北アメリカ原産の落葉低木。明るい葉色が爽やかだ。いずれも谷などの湿地に生える。

花材　姫百合二種（百合科）
　　谷渡の木（茜科）
花器　通草蔓手付籠

グリーンカトレア

櫻子

知性があり完成度が高く、最も調和のとれたかたちである植物は蘭の花らしい。昆虫に与える花蜜も、正確に運んでもらう花粉も、緻密に計算して失敗のないように考えて、自分達の美しい姿を守ってきた頭の良い花の一族。

カトレアは熱帯の植物だが、ブラジルから苔や地衣類を運び出す際に、それらを梱包するために使われたらしい。この荷物を受け取ったカトレイ氏は梱包用に使われた葉の厚い植物に興味を持ち、育てたところ大輪の花が咲き人々を驚かせたという。１８２４年の事である。その蘭は増殖が遅く栽培に多くの経費がかかった。

特にカトレアは高嶺の花だが、こんな劇的なデビューだったとは！

その後、この蘭は高値で取り引きされ、西欧で品種改良が進んで、今では四輪立ちのグリーンカトレアも栽培されている。

この珍しい花を咲かせるまで何年かかったことだろう。

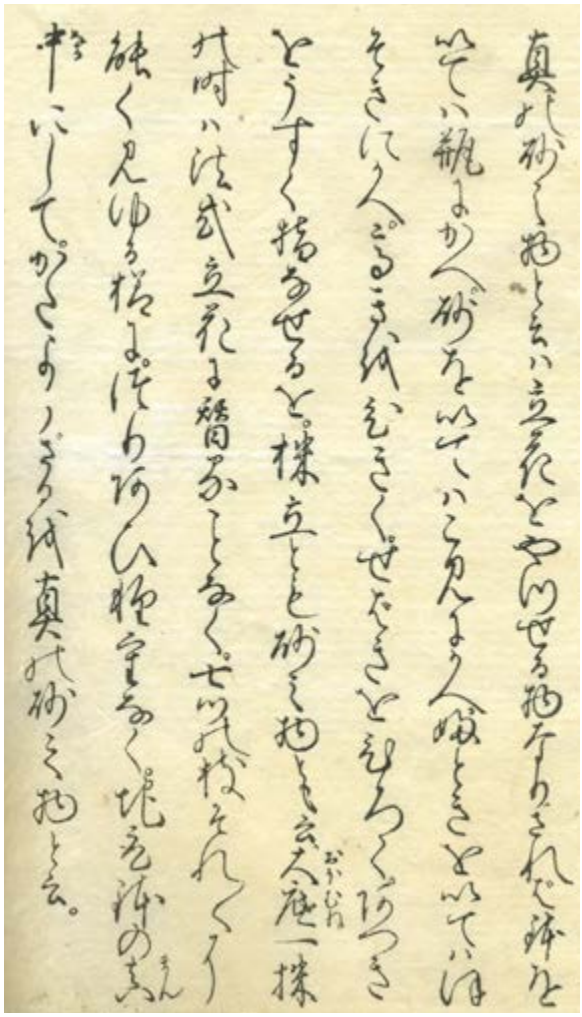
同じ蘭科のオンシジウムと取り合わせて、ミントグリーンの色を際立たせた。

花材　グリーンカトレア（蘭科）
　　オンシジウム（蘭科）
　　葱坊主（ユリ科）
花器　紺色ガラス花瓶

「立華時勢粧」の文章

今月号で紹介した「立華時勢粧」の文章が、元の木版刷りではどのような ものかを知っていただくために、初めの段落の部分を転載しておく。どうぞこの頁をめくりながら、読み進めてみてください。

例えば「を」の字だけ見ても、三つの字を使い分けている。



立花時勢粧　上

（前号の続き）

砂物真行草の事

真の砂の物と云うは、立花をやつせる物なり。されば鉢をもっては瓶にかえ、砂をもっては込にかえ、太きをもっては細きにかえ、高きを低く、狭きを広く、厚きを薄く指しなせるを、株立とも、砂の物とも云う。おおむね一株の時は法式立花に替わることなく、七つの枝それぞれによく見ゆる様に、つりあい軽重なく、地取り鉢の真ん中にして、かたよらざるを真の砂の物と云う。

行の砂物と云うは、元来一株なる物を、二つに割け、中をあけ、小心二つ、前置二つ、心のかたを男株といい、請の方を女株という。法式大様前に同じく、両方軽重なき様に、地取り鉢に随いて、苔晒木鮮にして株組、取り合い、はづみあり、意気あるところを専らにして、景気するどに花形勢力風流なる様に立つべきものなり。取り組み細工等外にしるす。

草の砂の物と云うは、一株二株、三株はまれなり。二株たりといえども、小心、前置、一方にのみ用いる事なり。但し一方はあしらい有りても然るべし。女株軽き時は、男株の方より長き枝をだし、或は心のすえ様にて軽重をはかり、請かと思えば流枝、控かと見れば副にして、或は大枝をもって小枝にかえ、小枝をもって大枝をあしらい、七つの枝一つも欠ける事なく、意気、はづみ第一に、艶あり、色あり、異曲風流

第三十一図
一株砂物　芦真
砂の物の内真の花形　専定寺
芦　竹　百合　小菊　桔梗　熊笹
仙翁花　杜若　著莪

に勢つよく、花形一面に束て見る時、釣り合い片落ちなきを草の砂の物という。たとえば文字の形のごとし。唐よう、日本よう、様々の流を書きやつすといえども、理に叶い、道にいたりぬる人は、読むこと安くして、頓にその理を悟る。立花もまたこれに同じ。

砂の物の内真の花形（第三十一図）
同　行の花形（第三十二図）
同　草の花形（第三十三図）

立花時勢粧上の終

ここまでが「立花時勢粧　上」の内容である。続く「中」、「下」には立花図がそれぞれ45図、40図掲載されているが、「下」の最初に秘曲の図の名称が22個書かれているのみで、文章による解説はない。

立花時勢粧中（立華時勢粧　巻二）

雑体の図（45図）

立花時勢粧下（立華時勢粧　巻三）

秘曲の図（40図）

「立花時勢粧　上」の文章を紹介してきたが、ここでその内容を少し振り返ってみよう。

「立華時勢粧　序」は立花の素晴らしさを讃えた名文だと思う。立花の技を身につけるのと同時に、この文章にあるような雄大な心の有り様を大切にしていたい。

「瓶上に南山の美をつくし」
「砂鉢に西湖の風色をうつす」
「ちからをもいれずして高き峰、深き溪を小床に縮む」
「至らずして千里の外の勝景をみること、その術、諸芸の及ぶところにあらず」
「古法の格式、草木の出生、もとより背くことなし」
「今ここに図する所の百二十瓶、四時の景物に随いて、会をなし、諸人庭に沓いれし席の花形なり。これ人の目だつべき色もなく、心とどむべきふしも侍らねど、よしや笑草。四方にはびこり、根ざしのかれぬよすがともならなむかしと、名付くるに時勢粧の字を仮り用いるものなり」

居ながらにして、自然の勝景を味わえる「立花」の術は、諸芸の及ぶところではないと言い切っている。同じ頃活躍

第三十二図
二株砂物　棕櫚真
砂の物行の花形　西村松庵
棕櫚　百合　晒木　松　苔　嫩　杜若
小羊歯　柘植　苔木

した尾形光琳の杜若図屏風なども、「居ながらにして、自然の勝景を味わえる」素晴らしい術だと思うが、「立花」には、実際に山や沢から集めた木や草花でつくる「生(なま)の」美しさがある。たしかに鍛錬をつくした人の立てた立花には、諸芸の及ばない「格」がある。

掲載されている百二十瓶（実際は百十八瓶）の立花図については、実際に「会の席」で立てたものだとのこと。目だつ色もなく、心に止めるべきものもないが、「立花」が廃れてしまうことのないように、あえて「時勢粧」の字を用いて記録を残すと書かれている。「立花」の神髄を究(きわ)める人によって、さらに磨きがかけられてゆくことを懇願されていたのだと思う。

「真行草の図」では、立花には真・行・草の花形があり、またそれぞれに真・行・草があり、すなわち九品(くぼん)の花形があると書かれている。

何が真で、何が行で、何が草だ、とは書かれていないが、図に示されているように、次のように覚えておきたい。

真の花形とは直真のこと。
行の花形とは除真のこと。
草の花形とは砂の物のこと。

「真」は人の「立つ」、「行」は人の「行く」、「草」は人の「走る」のと同じだとしている。

「古書に序・発・急の花と云われる」

「昔から、如来のように、菩薩のように、金剛力士のようにと云われるが、花道だけではなく、諸道諸堅芸もこうあるべき」

「高野大師（弘法大師空海）は筆の道を極められ、『皮・肉・骨』の三筆をふるわれたことで、日本一の書の達人と云われるが、立花の真行草すべてを立てる人こそ、立花の達人である」と述べている。

真の真行草は絵図のみで解説はない。続いて、行の真行草、草の真行草については絵図と共に文章でも述べられている。

ここで注意したいのは、九品の花形の解釈については、凡その基準を示すにとどめ、あまり具体的に「こうなったら何の何形」と云っていないことである。

真・行・草のそれぞれの持つ意味合いをよく理解することが大切で、具体的な手がかりを僅かに示すことで、私たち自身が立てる中で理解しようとするように導いている。

これはとても重要なことで、絵図も含めてそのまま鵜呑みにせず、自分自身で真理を得るべき、との教えなのだ。

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）

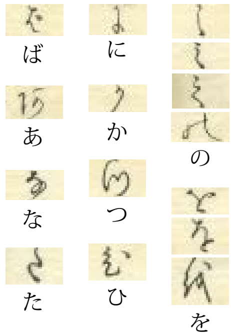
第三十三図
二株砂物　晒木真
砂の物草の花形　桑原次郎兵衛
晒木　松　芍薬　杜若　要　小菊
著我　撫子

8

「立華時勢粧」の文字

「立華時勢粧」の文章は行書と草書が織り交ぜられている。普通に読める字があるかと思えば、平仮名もあえて別の漢字の草書体をあてたりしてあるので、読むのに苦労する。それでも文章全体の視覚的なバランスの見事さにその苦労も忘れてしまう。これははたして富春軒仙溪の筆跡なのだろうか。と考えるのも楽しい。さらに、木版刷りの彫り師の技も流石である。

参考までに、その一部を掲載しておく。



明るい洋花　　櫻子

ブルーベリーは夏櫨の仲間だが、北アメリカ原産。南アフリカ原産のグラジオラスと北アメリカ原産の向日葵を合わせると、明るいいけばなになる。

花材　ブルーベリー（薔薇科）
　　　グラジオラス（菖蒲科）
　　　向日葵（菊科）
花器　角形花瓶（ヘレンド）

アガパンサス
トルコ桔梗　　仙溪

花形　生花　二瓶飾り
　　主瓶　行型
　　アガパンサス（彼岸花科）
　　副瓶　真型
　　トルコ桔梗（竜胆科）
花器　主瓶　トルコブルー陶鉢
　　副瓶　レースガラス小鉢

南アフリカ原産のアガパンサスと、北アメリカ原産のトルコ桔梗の生花二瓶飾り。故郷はまったく違う花なのに、素敵な共演を見せてくれている。生花の二瓶飾りは、花材のとり合わせで様々に楽しめる。互いに無い要素を加えることで味わいが増すように考える。

主株（草の花型　副流し）

子株（真の花型）

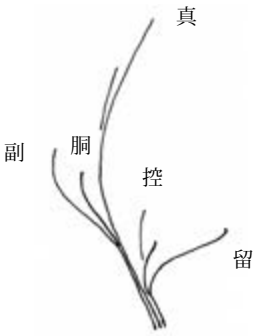
槙（まき）

花形　生花　行型

花器　白竹竹筒

花屋で槙の名前で売られているのは犬槇（いぬまき）科の朝鮮槙（ちょうせんまき）で、夏の、特にお盆の頃の生花にいけることが多い。基本的な行の花型にいけた。

仙溪



桑原専慶流いけばなテキスト614号
2014年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出合い花（11）

仙溪

富士薊（ふじあざみ）
ノンリーフの枯花

富士薊は富士山周辺の山地に見られる菊科・薊属の多年草。日本の薊の中では最も大きな花を咲かせる。珍しい貴重な花だが、花フジさんの山の畑で育ったとのこと。

花フジのとし子さんに、是非「出合い花」に使って！とのリクエストをいただいたので、その場でお相手を探すことに。ふと目にとまったのが、花フジのアキチャンが手に持ったノンリーフの枯花だった。

南アフリカ原産のストレリチアの仲間で、ほとんど葉のない茎だけが長く伸びるのが特徴。耐寒性と耐乾性を併せ持つ。こちらも花は珍しく、それも枯花ということで、珍しいもの同士を出合わせてみた。

とし子さんのこだわりと、アキチャンのこだわり。手にした花にそのこだわりはすでに表れている。また、花を育てる人や集めてくる人の思いを感じていけるなら、花器の選択や花形を工夫して、自（おの）ずといいいけばなになる。

自分で身につけた自分自身のこだわりを持つ。とても大事なこと。

花材　富士薊（菊科）
　　ノンリーフ（芭蕉科）
花器　掻き落とし花瓶

いけばな

桑原専慶流

テキスト

2015年
8月号
No.626

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

為朝百合

〈表紙の花〉　櫻子

「立華時勢粧」には花材について詳しく解説されていて、その中に為朝百合も出てくる。そこには「為朝百合。鬼ゆりに対して名付く。富士ゆりとも、うたゆりとも所に替わりて名異なるなり。」と書かれている。為朝とは平安時代末期の武将、源為朝のこと。鬼にも勝る鎮西八郎為朝の勇ましさにあやかった命名だろうか。

現在の植物図鑑で調べると、タメトモユリは伊豆諸島に咲くサクユリのこととある。とても大きく咲く百合で白色大輪のカサブランカの母種らしい。源為朝は伊豆に縁があるためそう呼ばれてる。

しかし、現在京都で為朝百合と呼んでいるのはサクユリではなくて表紙にいけた百合をさす。黄色い帯に赤い斑点はヤマユリに似ている。おそらく古くからヤマユリの一種を京都周辺で栽培し、為朝百合と呼んでいたのだろう。この百合の美しさと風格は、人気絶大な人物の名をつけるのに相応しいと思う。

為朝百合の名がつけられた二つの百合。豪傑の武勇伝を語り継ぐということも、今ではなくなりつつあるけれど、花を通して古の時代の空気を想像するのは面白い。いつか伊豆諸島の為朝百合にも会いに行ってみたい。

花材　梅花躑躅（躑躅科）
　　為朝百合（百合科）
　　唐糸草（薔薇科）

花器　飴色釉花瓶

ブルーベリー

〈2頁の花〉　櫻子

ブルーベリーは夏櫨と同じ躑躅科・酢の木属の低木で、原産地は北アメリカ。近年、果樹として日本でも栽培が盛んになってきた。

私も数年前に、ブルーベリー狩りをしたことがある。熟した果実を夢中で集めるのは楽しかったが、上を向いて採るので、帽子をかぶっていても鼻の頭が日焼けして暫く痛かった。

撓わに稔った実はとても健康的で、太陽のようなファッションピンクの薔薇とよく似合っている。トルコで買ったブルーの絵柄の花瓶にもピタリとのった。赤紫色のアンスリウムを加えて、実が熟した色を想像して楽しんでいる。

花材　ブルーベリー（躑躅科）
　　アンスリウム（里芋科）
　　薔薇（薔薇科）
花器　トルコ花文陶花瓶

ギョリュウ

〈3頁の花〉　仙溪

ギョリュウは中国原産の落葉小高木で、檉柳または御柳と書く。春と秋に桃色の小さな花を枝先に沢山咲かせ、そのあとの実が裂けると白い綿毛で種が風に飛んでいく。乾燥地でも育つそうだ。

漢の武帝の宮殿にも栽培されていたそうで、そう聞くと妖艶な雰囲気にも見えてくる。ギョリュウが雲で、洋種山牛蒡が龍に見えてきた。

花材　ギョリュウ（科）
　　洋種山牛蒡（科）
　　トルコ桔梗（竜胆科）
花器　コスタボダ赤色ガラス花瓶

出逢い花（21）　仙溪

棕櫚竹
エピデンドラム

家の茶室の前庭に棕櫚竹（しゅろちく）が植わっている。竹と名がつくが竹の仲間ではなく、椰子の仲間。中国南部からラオス、タイの原産で、耐寒性が比較的強いので、日本の庭にも植えられたり、室内用の鉢植にされている。

棕櫚竹の仲間に観音竹もあるが、葉の広いものを観音竹、細いものを棕櫚竹と呼んで区別しているようである。

午後の僅かな時間、棕櫚竹のうしろの塀に影が映るときがある。涼しげな葉影が風でキラキラと揺れる。

さて棕櫚竹の傷みの無い葉を一枚。どんな花を合わそうか。日本の夏草ではしっくりこない。やはり南国の花が似合うだろう。でもアンスリウムはよく使うし、ということで見つけたのが小振りのエピデンドラム。花屋の棚で「私はどうですか?」と声をかけてくれたので、大事に連れて帰った。

さてお次は器。以前、南の島で感じた木陰の風の心地よさを思い浮かべて、白い器にしぼる。完成度の高い形よりも、自由さを感じる形。と考えて、この花器を選んだ。胴が少し窪んでいて、点線と実線で輪が描かれ、中心に十文字の絵柄。私には環礁（かんしょう）の中で泳ぐ海亀に見えてきた。

花材　棕櫚竹（椰子科）
　　エピデンドラム（蘭科）
花器　白釉陶扁壺（八木一夫作）

立華時勢粧を読む　⑭

立花秘傳抄　五

砂の物真行草

株立を真の砂の物と名づく。心ふときをよしとす。苔晒木、異曲に、景気すさまじく、七つの枝、意気はづみありて、勢いつよく、株よく見ゆるを、第一とする故、株立とも名づく。生を後より付け、前置をかるく、胴作りを用いざるも、皆これ株をよく見せんがためなり。

同じく軽き心は高く、重き心は低く、請は苔晒木のふときを短く、流枝は長く出して、心と張り合い、控枝は請の勢いを請けて、はづみ面白く、下草しげきは、花形はづまず、さるによって、軽きを賞翫す。株立は下木下草に至るまで一風ある物をえらび、花形するどに見ゆるを専らとす。或師古詩を引いて、

連峰　天を去ること　尺に盈たず
枯松　倒しまに掛って　絶壁に倚る

この句の心をもって、花形趣向すべしと云えり。

〔出典〕李白「蜀道難」

心の高さ三尺ある時は、横のひろさ六尺。或は心の高さに二長半、又は鉢に双倍とも云えり。鉢の大きさ、一尺より一尺五寸までを、小砂の物といい、一間床に用ゆ。一尺五寸より二尺五寸までを、中砂と云いて、二間床に相応す。これより次第に大きなるを大砂と云う。

この「砂の物真行草」の文に添えられている図については、テキスト614号「立花時勢粧・上、砂物真行草の事」ですでに掲載しているので、ここでは「立花時勢粧・中」より三つの砂物図を選んで紹介する。

真の砂の物　第六十一図
一株砂物　松眞
中野小左衛門
松　晒木　杜若　薄　夏はぜ　柘植
樫木　檜扇

砂摺（すなずり）の株（水たたきとも云う）と云うは、水より二三分ほど出るように、上を一文字に切り、請の方おもき時は、副の方にすえ、副の方おもき時は、請の方に置いて、一瓶の軽重をはかる物なり。二株砂同前。但し本株に縁をはなれず、うつりおもしろく立てるを習いとす。

前置の水ぎわは、幹を一所によせ、ばらばらにならぬように、株に引き付けて立てるを、能（よ）く寄ると名付けて、古代より専らにする所なり。

立花は遠山の気色、株立は目前の景気にて、枝葉つくろわず、みきけずらず、自然の奇麗を用ゆ。古人云う、松の古葉、梅の枯枝、そのまま見るこそ面白きに、初心の人は、切りとりつくろいなどするは、無下の事なりとぞ。

行の砂の物立てようは、二株にして、一方へは心、正心、見越、副、前置、これを男株という。一方へは請、流枝、正心、前置、これを女株と云う。株二つ立てる時は、正心二つ、前置二つ用うべし。これ二つ真の格式になぞらえたる物なり。然る時は両方の株、軽重なきように立てるを専らとす。

同一方の株苔ならば、一方は晒木を用ゆ。一方直に立たらば、一方は斜になし、一方自然どまりならば、一方は一文字に切るべし。長短高下、圓方曲直と、同意ならざるように取り組むべし。

行の砂の物

第六十七図
二株砂物　伊吹真
中野五郎左衛門
伊吹　晒木　松　苔　杜若　百合
小羊歯　柘植　要　檜扇

前置一方木ならば、一方草を用い、一方あざやかなる物ならば、一方はこまやかなる物、やわらかなる物にはかたき物、白き物には赤き物と、心得て指すべし。正心も又かくのごとし口伝。

草の砂と云うは、株二つなれども、正心ひとつ、前置ひとつなり。これ常の立花の法式、七つ枝の名目にしたがう故なり。女株男株、さのみ軽重にかかわらず、心の方かろき時は、請の方よりあしらい、請の方かろき時は、心の方よりあしらい、花形一面につかねて見る時、釣り合いよく、片落ちなきを、草の砂の物と云う。古来用いるの花形にして、近代板行の図に、あまたしるす所なり。

株立は、異曲風流に、意気はづみを第一と立てるといえど、とりわけ、草にかぎりて、一手珍しき作意なくては叶わざるものか。ある師古詩を引きて云う

江翻(ひるがえ)り石走りて雲気流る
幹は雷雨を排して猶(な)お力争す

〔出典〕杜甫「楠樹為風雨所抜嘆」（楠樹風雨の抜く所と為るの嘆き）

この句の心をよく味わって取り組むべし。一瓶の内に一枝風流なれば、ほかこれにあらそいて働きあり。さればむつかしくあしらいがたき枝にこそ、初心巧者のわかちも知れ、又は珍しき花形も指し出して、人の手本ともなるべきと云えり。

第三十六図
二株砂物　太藺真
冨春軒
草の砂の物
太藺　芍薬　松　晒木　杜若　小菊
著我　嫩

【テキスト618号　内容の訂正】
立花十徳（の10行目）
事(つか)えずして仏縁あり

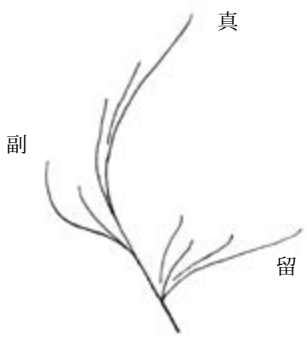
貝塚伊吹　　仙溪

花型　生花　草型　留流し
花器　煤竹竹筒

貝塚伊吹は檜（ひのき）科の常緑樹で、伊吹の変種。伊吹の葉先が針状に尖るのに対して、貝塚伊吹は葉先が丸いので、触っても痛くない。大阪府貝塚市との関係については不明らしいが、貝塚市尊光寺には推定樹齢４００年の貝塚伊吹があり、市の天然記念物になっている。

貝塚伊吹は撓めやすいので、生花の基本を身につけるにはもってこいの花材だ。しかし、春の開花時期は避けた方がいい。枝一面に雄花がついている。

作例は留流しの花型で、副と同じくらいの長さに留をつくっている。副の枝先を上げて、長く伸ばした留を際立たせる。



雪柳　二輪菊　　仙溪

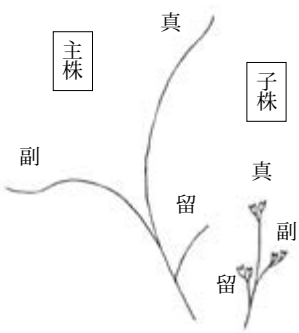
花型　生花　株分け
主株　草型　副流し
子株　真型
花器　飴色釉水盤

株分けの生花のくだけた雰囲気が好きだ。二種類の花材の組みあわせを考えるのも楽しいし、なにより広い水面が気持ちいい。剣山でいけたあと、小石で隠して水をはると、水際の美しさが際立ってくる。

季節の枝と草花のとり合わせが一般的だが、背の高い草花と低い草花、観葉植物だけの組みあわせ、同じ花の色違いなど、自分で考えて工夫する面白さがある。

花型はどちらか片方に動きをつくるようにして、もう片方でその動きを受け止める。静と動の対比が見所となる。

たとえ教わっていない組みあわせでもいい。オリジナルの株分け生花をいけてみてほしい。いい感じにいけられたら写真に撮っておこう。見せて頂けるのを楽しみにしています。



縞薄　女郎花　桔梗

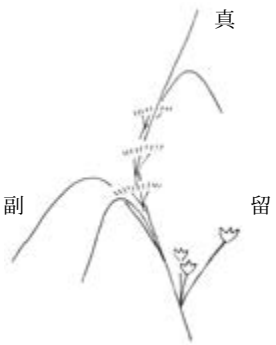
仙溪

花型　生花　三種挿し

花器　小判型陶水盤（伊藤典哲作）

涼を感じる生花の作例。縞薄（しますすき）は薄の中では比較的ながもちする。水盤に足元をそろえて立てるだけで、清々しい空間が生まれる。

薄の葉は左右に広がるので、前後に葉がくるように茎を大きく撓めて真とし、副や胴には片側だけの葉にしたものを挿している。ただ、実際にはなかなか難しい。納得のいく姿になるように、葉さばきの加減をその都度工夫する。葉を整理しすぎるとギスギスするし、残しすぎると生花にならない。ちなみに作例では3本の縞薄を使っている。



桑原専慶流いけばなテキスト626号　2015年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

花摘み

櫻子

少しでも涼を感じるようにと、白竹の平籠にいけてみた。タニワタリノキとミヤマナルコユリで緑の繁みをつくって、その間から小さな花たちを覗かせる。籠に野菜を盛るような感覚でいけてみた。こんな野の花を集めたようないけばなも好きなのだ。

最近、庭木や花の手入れをするようになった。米の磨ぎ汁も活用している。庭の草花が元気に伸びると、玄関の掛け花などにいけたりできるので嬉しい。

野の花を摘む楽しさは、太古からの遺伝子に書き込まれているのではないかと思う。摘み草料理が人気があるのも頷ける。自然の中で宝探しをしているような感覚。それによって心と体がよろこぶ感覚を、私達はきっと生まれた時から持っているのだ。

作例のタニワタリノキも、数年前に岡山の先生が庭から切っていけておられたので初めて知った花だ。不思議な白い球形の花だが、もとは南国の谷間や湿地の植物とのこと。今回は花屋に売られていた。他の花も、花屋さんで目に付いた花たち。これも私の花摘み。

花材　姫百合（百合科）
姫金魚草（胡麻の葉草科）
谷渡の木（苦科）
深山鳴子百合（百合科）
赤花歌仙草（菊科）
花器　楕円形平籠（公長齋小菅）

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
8月号
No.638

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

エレムルス

〈表紙の花〉　櫻子

花材　エレムルス（百合科）
　　トルコ桔梗（竜胆科）
　　モンステラ（里芋科）

花器　陶花器（市川博一作）

エレムルスはイラン、アフガニスタン、ヒマラヤ等に分布する宿根草。英名はデザートキャンドル（砂漠の蝋燭）またはフォックステイル リリー（狐の尻尾百合）。1本に300から500の花をつけ、高さ2mになるものもある。

花色は黄色を中心に、オレンジ、白、サーモンピンクなど。5月から7月頃に出荷される。

以前、飼い猫のレモンちゃんが野良猫と喧嘩したとき、相手を威嚇するためか尻尾がいつもの何倍にも膨れていたのを思い出す。表紙の満開のエレムルスはまさにその時の尻尾みたい。きっとエレムルスも乾燥地の厳しい環境に負けないぞ！と咲いてきたのではないかしら。

横から見た奥行き

クルクマ３色

〈２頁の花〉　櫻子

花材　クルクマ３種（生姜科）
　　向日葵（菊科）
　　ミリオクラダス（百合科）

花器　練込陶花器

クルクマの小輪種は優しいイメージ。夏には爽やかな白花を主に。

横から見た奥行き

ヒマラヤの百合

〈３頁の花〉　櫻子

花材　百合「クシマヤ」（百合科）
　　京鹿の子（薔薇科）
　　羽団扇楓（楓科）

花器　陶花瓶（鈴木爽司作）

ヒマラヤの百合「ネパレンセ」の改良種「クシマヤ」。淡緑色に臙脂色が入る。神秘的で美しい百合だ。

横から見た奥行き

棕櫚竹（しゅろちく）　仙溪

花材　棕櫚竹（椰子（やし）科）
　　アンスリウム（里芋科）
花器　陶花器（竹内眞三郎作）

庭の棕櫚竹をときどき間引いている。出逢い花でも一度、庭から切った葉を使ったことがあったが、今回は枝ごといけてみることにした。傷んだ葉は切り、勢いのある葉を残す。作例では3本の棕櫚竹を使っているが、厚みも広がりも充分にあり、なかなかの存在感がある。

棕櫚竹はヤシ科・カンノンチク属の常緑低木で、中国南部原産。日本には琉球を経て渡来し、三百年ほど前から栽培されてきた。葉は棕櫚（しゅろ）に似て、幹は竹に似る。ただし竹のように中空ではなく、とても硬い。

この棕櫚竹の広がりには、大輪の赤いアンスリウムがよく似合う。赤黒い品種も混ぜると、色に深みが加わった。

別の器でビルのエントランスにいけたのを、左横から見たところ。

立花秘傳抄　一

常磐木之部（つづき）

枇杷

祝言上中。

苔晒用いず。

心、副、見越、請、控枝。

若木の直なるに葉の付けるは正心にも用うべし。

流枝にならず。

本草綱目に云う、その葉の形琵琶に似たり、故に名付く。

草木によらず陰陽を指しわくるといえど、大葉にかぎりて陰陽を第一とす。易曰く、万物生成、陰を負い陽を抱く、されば草木の発出る時は表を内にして裏を外にす、これなり。葉ひらけて後、表はやわらかにして天にむかい、裏はこわごわしくして地にむかう。されば葉の表は陽、葉の裏は陰なり。

枇杷、柏をもぎ葉として三枚にても五枚にても遣う時、一枚にても二枚にてもかならず裏を見すべし。或いは葉先そりかえり、又は横ざまより裏すこしなりとも見ゆる時は、陰陽備わるとて是をゆるすなり。

三枚五枚遣うとも、ちいさき葉は中に遣い、大きなる葉にて外よりいだかせて立つべし。これ出生の当然の理なるもの歟。もし大小内外乱れる時は、かならず見にくき物なり。大葉四枚六枚遣うこと嫌うといえど苦しからず。口伝。

陰ばかり陽ばかりに遣いて苦しからず。口伝。

おもとに立合て苦しからず。口伝。

花形によりて大葉水ぎわに遣うて苦しからぬ事あり。

枇杷、柏をもぎ葉にて遣う事むつかしき物なり。しまりたる時は働かず、ゆるやかなる時はくだけやすし。ある師曰く、除いてのかざれ傍てそわざれ。この語を覚えて指すべしと云えり。

広葉は五、七、九枚遣うとも残らずよく見えるように指すべし。一枚の内半分なりともかくれる事を嫌う。師云う、広葉は名を指すべしと。

前枇杷、前柏とて胴作りに立てる時は、まず一枚葉先すぐなるを裏を見せて立て置く。それよりうつりを請けて三枚、五、七枚、あるいは

歟＝疑問・反語・詠嘆（～だなあ）で使う。ここでは詠嘆として使われている。

九枚ことごとく働きありて、陰陽よろしく、又つかねて一木に見る時、景気面白様に立つなり。

古来より大葉遣いは枝を付けずにして葉ばかりつかい来る。これをもぎ葉立てと云って、今様さのみ好まず。旨趣（ししゅ）いかにとなれば、枝ある物を葉ばかりに遣う時は、出生の景気うつらずしてしかも働きなし。五枚三枚遣うとも一枚はかならず枝を付けて遣うべし。

前枇杷とも胴枇杷とも云い、これをもぎ葉遣いとも名付く。

柏は葉と葉との間縁遠くても苦しからず。枇杷は縁近く指すべし。これはもぎ葉立ての時の事なり。

大葉遣い初心の時は、縁のきれる事まま多し。或いは正心の後ろより流枝の上を前へとおして

前柏、柏の胴とも云い、これを枝葉遣いと云う。

請にて縁をきり、或いは副の下を前へくぐらせては、控枝にて道をきる、前後友に同断なり。

大葉は中のしべを見て遣うべし。下へなびき

たるは生葉なり。さかさまに遣うは死葉なり。

枇杷、柏、心に立てる時は、一本は立てず。請、副、控枝などへ指し下げるべし。又はもぎ葉にて下をあしらうべし。或いは副の付きにくき心には、大葉一枚にて副をもたする事あり。流枝の方おもき時は大葉一枚にて請をあしらう事あり。別て大葉遣いには伝授あまたある事なり。

前号から柏と枇杷の解説が続いたが、これら広葉の類は一瓶に一種類のみを使うのが望ましいと書かれている。特に枇杷は立花図の多くに使われている。どの絵図でも役枝とのバランスが見事である。今は正真の受筒を隠すために使うことが多いが、枇杷の葉によって立花に躍動感を加えられることを見直したい。

ここに枇杷を使った立花図を二つ再掲載しておく。

第八十一図
左行の対の花　中川常意
松　山吹　躑躅　杜若　椿　伊吹
小羊歯　小菊　要　檜扇　柘植

第十七図
立花　松除真
除心の内行の花形　中流枝立　寺田八郎兵衛
松　晒　百合　枇杷　柘植　紫陽花
要　小菊　檜扇

花あるからこその心広めたい

京都いけばな協会新会長 桑原仙溪さんに聞く

京都を拠点に活動するいけばな33流派でつくる京都いけばな協会の新会長に、華道桑原専慶流家元の桑原仙溪さん（55）が就任した。副会長として会の運営に携わって6年。新たな責務を担う桑原さんに、いけばな文化への思いや花を生ける心について聞いた。（太田敦子）

「いけばなを通して日々の暮らしや社会生活に役立つメッセージを発信できれば」と話す京都いけばな協会の桑原仙溪会長（京都市中京区・冨春軒）＝撮影・坂本佳文

「文化として学校教育の中に」

―いけばなの魅力をどうやって伝えていくか。

いけばなには芸術的な側面ももちろんあるが、私は東日本大震災後に東北を訪れた際、花があったからこそ見知らぬ人たちと心を通わせることができた。いけばなを習うことで新しい交流が生まれ、心を込めた作品が家庭や会社で生かされる―そんな存在意義を問い直したい。若い人が「何かやりたい」とアンテナを張った時に「いけばなってやっぱりいいよね」と思ってもらえるような企画ができれば。

いけばなは決して特別な存在ではなく、日々の暮らしを豊かにする一つのツールとして捉える人が増えることに期待している。

―今、流祖が残した書物を読み返している。

江戸時代初期に流祖が書き残したものを読んでいるが、現代に通じる考え方がたくさんあることに驚く。例えば「木に接する時には自然に従い、生まれ持った働きを導くだけ」といった記述があるのですが、非常に奥が深い。力ずくでねじ伏せようとするのではなく、植物を敬いつつ植物のことを知ってよさを生かす。この考え方はいけばなにとどまらず社会生活のさまざまな場面に置き換えられる。会長として、いけばなを通したこういう考え方を広く伝えてゆきたい。

―文化庁移転などの追い風もあるが、この動きをどう活用するか。

文化を暮らしの中に息づくものとして定着させてゆく好機だと思っている。その一つの方法として、学校教育の中に授業としていけばなを入れたいと協会を挙げて願っている。勉強というよりも、子どもたちが「文化って楽しいな、興味深いな」と思ってくれる機会になれば。習ったいけばなを家で生けて家族に褒められ、「ありがとう」と言ってもらえる。そんな経験を積むことができれば、暮らしにいけばな文化が貢献できるのかなと思う。

（京都新聞7月17日㈰朝刊）

美白（びはく）という名の百合

仙溪

花材　丸葉の木（満作科）
　　鉄砲百合「美白」（百合科）
　　女郎花（おみなえし）（女郎花科）
　　スプレー菊（菊科）
花器　布目陶花瓶（伊藤典哲作）

鉄砲百合は咲くと白い百合だと感じられるが、花屋に売られているのは蕾の状態なので、いけてしばらくの間は淡緑色がだんだん白に近づくのを眺めることになる。

蕾のうちから白さを楽しみたい。おそらくそんな思いから、この「美白」という名の鉄砲百合が生まれたのだろう。確かに蕾のうちから、はっとする美しさを感じる。緑の中でも不思議な存在感がある。ただ、咲いた時の自然な感動は半減するようにも感じた。

切り花の多くは過去の品種改良のお蔭で、より美しく、強く、大きくなってきた。近年は葉も大切にされ、また風情を残す改良も多く見受けられる。今後、どんな花たちに出逢えるだろう。

横から見た奥行き

株分け生花

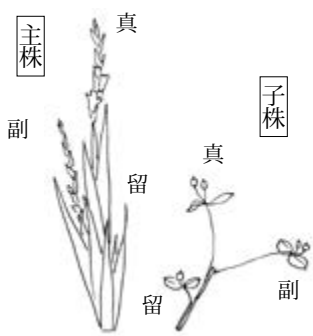
仙溪

花型　株分け
花材
　主株　グラジオラス（菖蒲科）
　子株　ヒペリカム（弟切草科）
花器　足付小判型陶水盤
（伊藤典哲作）

夏の生花には7月の檜扇、8月の朝鮮槙のほかにも、水辺を連想する植物として、太藺や蒲、姫蒲などもよくいけている。それらに加えて比較的暑さに強い洋花もいけることがある。作例のグラジオラスもその一つだ。

グラジオラスの生花は意外に難しい。作例では葉を外して組み直しているが、葉を外さない方がいい時もあり、その判断には経験から得た勘が必要になる。

ヒペリカムの名前で売られる艶やかな赤い実は、和名を小坊主弟切という。白いグラジオラスに赤い実がよく合っている。



夏の立花

仙溪

花型　除真立て

花材

夏櫨　梅花躑躅　檜扇　桔梗

笹百合　下野（紅白）　羊歯（しだ）

花器　粉青瓷壺（木村展之作）

この真の夏櫨は7月号8頁の立花と同じ枝だ。約一ヶ月持ったことになる。かなりの太枝だったことと、足元を長く削って込藁に挿したので、よく水を吸い上げたのかもしれない。檜扇が季節を感じさせてくれる。

横から見た奥行き

桑原専慶流いけばなテキスト638号　2016年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出逢い花（31）

仙溪

アナベル（紫陽花科）
鉄線（金鳳花科）
花器　ベネチアンレースグラス花器

アナベルは北アメリカ東部原産のアメリカノリノキの園芸品種で、紫陽花の仲間である。開花時は白色で、やがて緑色に変化して枝に残る。作例のアナベルも開花後に緑色になったところという感じ。このアナベルに紫色の鉄線を出逢わせたが、それだけでは地味なので、器で爽やかな華やぎを加えようとして選んだのが、このレースグラスの花瓶だ。

少し乾燥してふわりとした感じのアナベルに、レース越しに見える水と、鉄線の花の潤いが瑞々しい。

祇園祭後祭巡行　7月24日(日)

今年は健一郎、順之助、私の三人で参加した。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
8月号
No.650

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

グラジオラスとアジサイ

〈2頁の花〉　櫻子

花材　グラジオラス（菖蒲（あやめ）科）
　　紫陽花（あじさい）（紫陽花科）
花器　ステンレス籠

近年、アジサイは輸入も増えて、一年中いけられるようになった。今回も2頁と3頁にアジサイをいけているが、ともに花色が鮮やかだ。赤い方にはグローイング・アルプスという品種名がついていたが、他の花色もあるようだ。

グラジオラスも時期が長くて花色も多い。アジサイとグラジオラスで、お気に入りの色の組みあわせを見つけたら是非2種でいけておきたい。あとは似合う器を考えるだけ。これがなかなか難しいのだが。

夏なので、ひんやりとしたステンレス製の籠を選んだ。大小二重に重ねると、銀色の森のように見える。籠には水が入れられないので、こういう時のために黒い器を合わせてある。

横から見た奥行き

トリアシショウマ

〈3頁の花〉　仙溪

花材　鳥足升麻（雪の下科）
　　紫陽花（紫陽花科）
　　オクロレウカの葉と実
　　（菖蒲科）

花器　カットガラス花器

トリアシショウマはユキノシタ科チダケサシ属の多年草。葉が萎れやすいが、水揚げに充分気をつければ、なんともいえない野性味のある花だ。

オクロレウカは葉をよく使うけれど、春の花と、そのしばらく後で希に実も出てくる。ただし、茎が柔らかくて実が重いので、あまり長くは使えない。でも、こちらも野趣を感じる花材だ。

重厚なガラス花器に、鮮やかな濃いピンクの紫陽花と投入にした。トリアシショウマがいい味を出してくれている。

横から見た奥行き

ピッチャープランツ（食虫植物）

〈表紙の花〉　櫻子

花材　黄花カラー（里芋科）
　　プロテア（ヤマモガシ科）
　　サラセニア（サラセニア科）
　　アンスリウムの葉（里芋科）
花器　濃赤色ガラス花瓶

虫をとらえて袋で消化するという、風変わりな生態を持つピッチャープランツと呼ばれるサラセニアの葉。北アメリカ原産で「ペテン師のトランペット」とかオウムのくちばし」などと呼ばれている。

食虫植物は大抵気持ち悪い姿のものが多いが、サラセニアの葉は赤い網目模様が美しく、個性的で側に飾りたくなる。昆虫を捕らえ消化して、やせた土地でも生き延びることが出来るので、その不思議な魅力に引きつけられているのかも。

初夏の頃咲く花も独特な形をしていて、ミシシッピーの沼地で育つ風景はまるで遠く離れた惑星の景色のようだ。

トロピカルな雰囲気があるのでカラーとプロテアを一緒にガラス器に生けてみた。

横から見た奥行き

山桃（やまもも）の生花

〈4頁の花〉　仙溪

花型　草型　副流し
花材　山桃（山桃科）
花器　銅製手付薄端

立花秘傳抄（りっかひでんしょう）の石楠花（しゃくなげ）の解説に、石楠花をいける場合に楊梅（やまもも）の葉を使うといいと書かれている（今号6頁）が、楊梅はヤマモモの漢名で、ヤマモモとシャクナゲの葉の付き方はよく似ている。

ヤマモモは東アジアの暖地に育つ常緑高木。実は赤く熟し食べられる。中国には樹齢千年に及ぶヤマモモもあるそうだ。

大枝から枝どりしていけたが、折れやすいので注意を要する。

栂（つが）の生花

〈5頁の花〉　仙溪

花型　草型　留流し
花材　栂（松科）
花器　銅製手付立花瓶

ツガ（トガ）はマツ科ツガ属の常緑性針葉樹で、マツ科モミ属のモミによく似るがモミのように葉先は尖らない。またイチイ科のイチイ（アララギ）にも似るが、実が異なる。

花展でいけたあと、家の玄関に飾った。重みがあるので花器は丈夫で安定感のある銅の立花瓶を選んだ。貴重な花材に感謝をこめて、水を毎日入れ替えることが肝心。

頭風＝頭痛。　長春＝中国原産の四季咲きバラ。　至孝＝この上もない孝行。　躑躅＝少し歩いては止まること。　中比＝なかごろ。そう遠くない昔。

立華時勢粧を読む　㊲

立花秘傳抄　二

花之部（つづき）

石南花

祝言。中。

本草綱目に曰う、千石の間、陽に向かう処に生ず、故に石南と名づく。

一名、風薬。よく頭風を治す、故に名づく。

順和名、ともら木、くさなむさ。

石南花、葉あしき物ゆえ、楊梅の葉をかりて用いる。

長春

祝言。下段。

花の常に絶えざるを以て、長春と名づく。

異名、月季花、月々紅、闘雪紅。

又曰く、この花四時にある、故に日月花と云う。

躑躅

祝言。上中下。

陶隠居本草の註に云う、羊誤ってこれを食すれば、躑躅して死す、故にこれを以って名づく。世俗に云う、羊の性至孝なり、この花蕾んで赤きを見て、母の乳となす、躑躅して膝を折り、これを飲まんと欲す、故に名づく云々。

古歌

花さけば秋かとおもふ火とり草見るに紅葉の色もまかへば

浅からぬおもひを人にそめしより泪にいろは小つつじの花

姥つつじ

同前

姥つつじは葉のなきをいう。

山つつじと云うは、花葉ともに、ちいさく高くはえる故、心に用いる。むらさきつつじ、同前。心に立てる時は、請、副、控枝、流枝なんど、つたいおもしろく、あしらい花やかに、下はもちつつじ、小つつじ、琉球つつじなどにて、色取りよく、誠に春の山を、見るごとく立つべきなり。

蓮花つつじ

非祝言。上中下。

羊不喫草、黄躑躅という。

餅つつじ

祝言。水ぎわ。

羊躑躅という。

五月つつじ

祝言。水ぎわ。

本草に、茵芋（さつき）、杜鵑花。

段のつつじと云て、いろいろのつつじをあつめて胴、前置、流枝、或いは控枝などへつづけて立てるなり。これは賀茂山の檀のつつじと云、名所の風景を、中比の名師瓶上にうつして花形となす。これ相伝の花なり。

つつじは苔の付やすき物なれば、立花にもほそきを用いる。

かうぼけ　榠樝（めいさ）

非祝言。控枝、流枝、中段まで用いる。

常のぼけは水ぎわばかりに用うべし。

馬酔草花（あせほのはな）

非祝言。花は中下。

葉ばかりは水ぎわに用いる。

和名、あせみの花、あしひの花。

祝言にあらざる歌

おそろしやあせみの花を折たきて雨にむかひて祈るいのりは

池水に影さへ見えて咲香ふあしひの花を袖にこき入れ

あせほの花は、葉の下より咲き出て花うつむきたれば、高く指して見あぐる気色面白し。また松の奥、つげの陰よりかたき物に取り合わせて、ゆるやかに立つべし。

榠樝（めいさ）＝花梨（かりん）の別名。

ツツジは13の絵図に見られ、真に使われている立花が一瓶ある。第五十五図がそれで、二種類のツツジと山吹が伸びやかに生かされた、いかにも春らしい立花だ。立花瓶の大きな手の丸みが、ツツジや山吹の柔らかな動きと呼応している。

立花時勢粧の絵図にはいろんな立花瓶が描かれているが、花材の特徴や季節感にあわせて使い分けられている。どんな器に立てられているかも、是非味わって見てほしい。

第五十五図
立花　躑躅除真（つつじ）
小川源右衛門
躑躅　山吹　苔　松　杜若
柘植　熊笹　小菊　著莪

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』
（日本華道社刊）
※立花図転載
『華道古典名作選集　立華時勢粧』
（思文閣出版刊）

檜扇の生花　〈写真①〉

花型　行型
花材　檜扇（菖蒲科）
花器　黒釉水盤

檜の薄板をつないで作った檜扇と呼ばれる道具は、奈良時代に日本で生まれたとされているが、おそらくもっと以前から、現在ヒオウギと呼ぶこの花には悪霊を退散させる力が備わっていると考えられていたようだ。「古語拾遺」というものの中に、「烏扇」の名前で出てくる。

それによると、昔、神代に大地主神（おおとこぬしのかみ）が田をつくる際に、御歳神（みどしのかみ）の怒りによって苗葉が枯れてしまった。その祟りを去らせる方法の一つに「烏扇を以て扇げ」と告げられ、そのとおりにして苗葉は茂り、年穀も豊かに実った、とある。

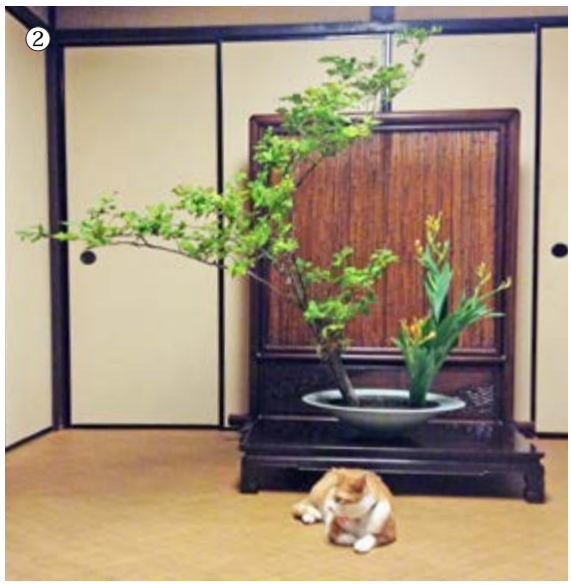
だとすると、後の時代に、貴族が厄除け魔除けのために、その烏扇の力にあやかって、それに似せて作ったものが檜扇で、それを常に身につけていたとも考えられる。

ひょっとするとこの花が、すべての扇子や扇のルーツなのかも。古の日本人は、今よりもっと自然に学ぶ謙虚な心を持っていたのだと思う。

夏櫨と檜扇の生花　〈写真②〉

花型　生花株分け
花材　夏櫨（躑躅科）
　　檜扇（菖蒲科）
花器　砥部焼青磁鉢（大西光作）

京都では昔から、祇園祭の花として檜扇をいけて飾る。いけられる檜扇のおよそ半分は、京都府北部の宮津市で栽培されたものだそうだ。茎がよく反り返った「黄龍」「真龍」という品種で、葉も整って美しく、生花をいけるのに向いている。



八坂神社前にできた祇園祭ぎゃらりいでの檜扇展示会に、青磁の大きな水盤を器にして、ナツハゼとヒオウギで株分けの生花を出品した。出品中はナツハゼに青紫色の鉄線を絡ませていたが、広い水面に涼しげに映っていた。

写真は、会期を終えて持ち帰り、玄関にいけなおしたところ。すっかり傷が治ったレモンちゃんが、器の水を飲みに来ては、花の前で風流を楽しんでくれていたようだ。

夏櫨と檜扇ほかの投入　〈写真③〉

花材　夏櫨（躑躅科）
　　檜扇（菖蒲科）
　　為朝百合（百合科）
　　桔梗（桔梗科）
　　松明花（紫蘇科）
　　草連玉（桜草科）
花器　陶花器（竹内眞三郎作）

祇園祭いけばな展で、大丸京都店にいけた花。ヒオウギは高さを出すために葉蘭で巻いたホルダーに挿している。朱塗りの敷板に白黒のモダンな器。厄除けの花と、色付き始めたナツハゼ。白、青紫、黄、赤の花で雅な祭のいけばな。

タニワタリノキ

櫻子

花材　谷渡の木（茜科）
　　姫百合2種（百合科）
花器　通草籠

岡山の先生が育てたタニワタリノキを初めて生けたのは、4年程前で、それから花屋さんでも切り枝を見るようになった。

屋久島原産の珍しい常緑低木で、谷間に群生するところからこの名前になったらしい。クチナシやサンタンカと同じくアカネ科の木。花は丸く咲きルリ玉アザミに似ていてとても可愛らしい。

細長い雄しべが突き出すからか、人工衛星の木という名前もある。

夏の頃に艶やかな緑の広葉をつけた枝はありがたい。この時期の枝物は種類が限られていて、小さく生けても伸びやかさを感じさせてくれるひと枝だ。

アケビの籠にヒメユリと生けて、軽やかで涼しげな花として楽しませてくれた。

ペンフレンドに会いに

母・素子の妹、章子さんには、中学生の頃に文通を始めたドイツ人女性の友達がいる。6月に会いに行くというので、アメリカへ同行した。

章子さんのペンフレンド、カリンさんはオペア留学（海外ホームステイ先でベビーシッターをしながら学校に通う）でアメリカを訪れた時、同じくドイツ人留学生と出会って結婚。現在は、カリフォルニア州サンフランシスコ郊外の、プリザントンに暮らしている。IT企業が集まるシリコンバレーで働く人も多く、比較的所得の安定した人が多く住む町だ。

私達4人（もう一人、カリンさん繋がりの友人、花苗（かなえ）さんが加わって）はカリンさんの家に寝泊まりして、一緒に食事をつくったり、公園をゆっくりと散歩したりしながら、新たな親交を育んだ。

カリンさんの周囲の人は皆、健康志向が強く、毎朝散歩し、ジムに通い、少し値段が高くても有機野菜にこだわって、ファーマーズマーケットで旬の野菜や果物を買う。「健康に注意して、明るく楽しく暮らすことで、医療や薬に頼らず、年を取っても自分のやりたい事ができるようにしてるのよ」とカリンさん。私達をいろんな所へ連れて行くために、毎日何時間も運転して下さった。とても優しくて、タフな女性だ。

①

②

③

④

⑤

カリンさんに強く勧められて、章子さんと私達の3人で、ヨセミテ国立公園にも行くことが出来た。花崗岩の岩山に囲まれた、緑豊かな渓谷だ。特に春から初夏までは雪解けと雨によって雄大な滝が生まれる。なかでも北アメリカ最大落差のヨセミテ滝は、公園内のいろんな場所から見る事ができ、遠くからの眺めがなんとも美しい。

ヨセミテ渓谷には自然を満喫するために多くの人が来る。キャンプ場、コテージ、ホテルなどが、自然に配慮してつくられている。様々なハイキングコースがあり、それぞれの起点を結ぶ無料巡回バスが走っている。私達もヨセミテ滝の下滝を見に行ったが、森の中を流れる川をたどりながら、平坦な遊歩道を歩く楽しいコースだった。

歴史を感じるマジェスティックホテル（旧アワニーホテル）に泊まれたことも貴重な体験となった。岩山と森と川と。朝の散歩で野生のシカやリスに出会い、夜は星空を眺めた。

叔母が大切に温めてきた友情のおかげで、めったにできない体験をさせてもらえたことに感謝している。

①カリンさんの庭で摘んだ花でテーブル花をいけた。どの花も可愛い。
②隣に住むご夫妻と公園を散歩。ご主人は日本人。種子島出身で、若くして単身アメリカへ渡った強者（つわもの）。
③カリンさんファミリーとの朝食。娘さんの手作りマフィンにベーグル、ワッフル、フルーツ色々、スモークサーモン、ピクルス等々。
④⑤ファーマーズマーケットには色とりどりのオーガニック野菜、果物が。ジャガイモとブロッコリー。
⑥ヨセミテ滝の下滝でマイナスイオンを満喫する。
⑦雄大なヨセミテ国立公園はユネスコの世界自然遺産。
⑧ホテルで。寛（くつろ）ぎの空間が奥へ続く。
⑨日本で花をいけてねと、カリンさん夫妻にいただいたアンティークの水指に、赤いバラとサンキライで出逢い花をいけて写真に撮った。

⑥

⑦

⑧

⑨

桑原専慶流いけばなテキスト650号　2017年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

ルリタマアザミ

仙溪

花材　アナベル（紫陽花科）
　　瑠璃玉薊（菊科）
　　デルフィニウム・ベラドンナ（金鳳花科）
花器　白磁花器（福本双紅作）

ルリタマアザミはヨーロッパ原産のエキノプスという多年草の園芸種だが、朝鮮半島や日本の九州などに分布するヒゴタイ（肥後躰、平江帯）もほぼ同じような花だ。瑠璃色で球形の花は独特の面白さがあるが、瑞々しさに欠けるので、扱いが難しい。

涼しげないけばなにしたくて、マットな表面に仕上げられた白磁の器に、同系色のデルフィニウム・ベラドンナといけて、緑白色のアナベルで花と器を調和させた。花器のフォルムも軽やかで、青い帽子をかぶる女性のようにも見える。

横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
8月号
No.662

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

倉敷市真備町の大水害

7月5日未明から6日にかけて西日本各地を襲った集中豪雨。河川の氾濫や土砂災害によって二百人以上の方が亡くなった。その後の異常なまでの猛暑の中で、被災地では過酷な生活が続いている。

流派内でも数名の自宅が水没。親戚や友人が災難に遭い、復旧のために毎日大変な思いをされている人が多い。

世界各地で増えてきた異常気象。国や地方自治体は、今後増えるだろう自然災害に対するできる限りの対策を講じてほしい。今一度、国民の暮らしを守るという観点から、様々な見直しをしてほしいのに、被災地で断水で苦しんでいる間に、国は水道事業を民間企業に売り渡せる法律を成立させようとしている。政治の怠慢で人々が苦しめられるような人災は無しにしてほしい。

エレムルス

〈2頁の花〉　仙溪

花材　エレムルス（百合科）
　　ドラセナ・コンシンネ（竜舌蘭科）
　　プロテア（ヤマモガシ科）

花器　陶花器

砂漠のキャンドルとも呼ばれるエレムルス。中央アジア西部原産で乾

燥に強い。丈夫そうな葉と花を出合わせて、夏を元気に乗りきりたい。

横から見た奥行き

ニューサイラン2色

〈3頁の花〉 仙溪

花材　ニューサイラン2色
（竜舌蘭科）
ネオレゲリア
（パイナップル科）

花器　真鍮花器

チョコレート色のネオレゲリアと2色のニューサイラン。観葉植物だけでとり合わせた。それぞれの色や質感が、より印象的になる。金属花器がその印象を際立たせてくれる。

横から見た奥行き

羽毛鶏頭

〈4頁の花〉　仙溪

花材　ユーカリ（フトモモ科）
　　羽毛鶏頭（莧科）
　　ヒペリカム（弟切草科）
花器　陶コンポート

夏から秋の作例。ケイトウは種類が多い。トサカ、クルメ、ウモウ、ヤリ、ヒモ、それぞれ形状が異なり印象も違ってくる。

横から見た奥行き

レモンだより
花の近くがお気に入り。

立花秘傳抄　三

草之部

草初めて生ずるを屮と云う。古文に艸の字につくる。艸は百草の惣名なり。説文註曰く、草の字を用いるは非なり。草は計槎の実なり。今の俗、艸木の艸と為す。艸草通じ用いる事久し今改むべからずなり。

説文に枝柱なり。枝茎より生ず、故に枝柱と云う。又曰く、草を茎と云う、竹を筒と云う、木をば枝と云う。

花爾雅に云う、木これを華という。草これを榮という。花実らざるを英という。

金錢花

祝言。水ぎわ。金盞花(形によりて名付く)。

異名、長春菊(花のさかり久しきにより名付く)。

この花四季ともにあるといえど、霜ふり月の頃より二月までは、ことさらに葉も茂り花もかつ咲きて、前置、草どめによろし。水仙一色の前置に専らこれを用いる。針金を茎に通し遣うべし。

蕗花

祝言。水ぎわ。

異名、款冬花(冬にいたりて花さけばなり)。

虎鬚草(かたちによりて名付く)。立て様前におなじ。

著我

祝言。葉は水ぎわより中まで上る。花を中まで上る時は、下に葉をあしらうべし。仮葉の時は上までも用うべし。

異名、故蝶花。和名、こやす草。

著我は四時しぼまざる草にて木にあしらい、草にまじえて、重宝なる物なり。古人も著我は立花の輔なりといえり。然れども近代の人、檜扇を専らと遣うて、著我を用いざることは、至りて面白き所あることを知らざるものか。

著我の葉を水仙、杜若にかり用いる時は、三枚とつづきたるをそのまま仮るべからず。一枚づつもぎ葉にして借るべし。三枚とつづきたる時は、著我の気色にみえて水仙、杜若の葉とは見ゆべからず。

著我の借葉は鶏頭花(一枚高く用いる古法)、水仙、杜若、菖蒲、一八、花菖蒲、似たるをもって借るべし。

著我の葉先あしくとも裁ちつくろいて用いる事大いに嫌う。

ぬけしゃがと云うは、胴、正心に木を立て、副、請に草を立てる時は草の縁きれるなり。然るに正心の前に著我を高く立てのぼすときは、両方の草これ著我を媒として縁切れる事なし。

惣名＝総称。　説文＝説文解字。中国最古の漢字字書。後漢の許慎の著。　計槎＝?。　爾雅＝中国最古の辞書。

控葉（ひかえ）というは、葉のあつきをえらび、白根の少し上より切り、似たる葉二枚とりあわせ、生（なま）竹の皮目をうすくひらめに削り、根もとのあわせめある所より指し込み、小刀の刃を筋違（すじかい）にあてて折り付けて用いるなり。

著我の出生は外葉長く中ほど短し。名付けて鳶尾草（えんびとびのお）という。瓶に立てる時そのまま用いるは作意なきゆえ、一枚づつもぎて、扨出生の道理にかなうように立てるを生著我と云う。出生にそむきたるを死著我という。三枚立てる時は立葉必ず用うべし。葉先枯れたるもおもしろし。

高麗菊

祝言。水ぎわ。春の立花には賞翫の物なり。

第三十九図
立花　松除真
桑原次郎兵衛
松　柏　著我　芍薬　柘植　要　熊笹　小菊

針金を通して遣うべきなり。

鴨脚花（いちはつ）

祝言、中より遣いて水ぎわまで下る。

異名、紫羅傘（しらさん）。

この花出生直なるゆえ横へはいだすべからず。自然横へ出すべき景気の花ある時は、まず一本すぐなるを立て置き、横へも出すべし。杜若、あやめ、菅草、鶏頭花、すかし百合草、姫百合草、水仙、女郎花、藤ばかま、きすげ、しおん、あふひ、がんび、せんのう、紅花の類いづれもこれになそらえて知るべし。

あやめ

祝言。前に同じ。あやめとは菖蒲（しょうぶ）をいえど、俗専らこれをあやめと呼ぶなり。

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）
※立花図転載
『華道古典名作選集　立華時勢粧』（思文閣出版刊）

第四十図
立花　梅擬除真
桑原次郎兵衛
梅擬　薄　松　柘植　椿　夏櫨　柏　茗荷

ビバーナム・コンパクタ

〈表紙の花〉　櫻子

花材　カラー2色（里芋科）
　　ビバーナム（忍冬科）
花器　金彩ガラス鉢（ウルリカ作）

夏の時期、枝ものが少なくなるが、最近出回るようになった実もの。枝も太く立派で葉も実も多い。葉を間引いてやるとたわわな実がこぼれ落ちる様に見えてくる。

ウルリカ・ヴァリーンさんが描いたお魚が実を狙っている。紫色と白色のカラーもパクパク口を開けてる海藻かも。

深い海の中にいるような景色。

横から見た奥行き

会場　市民交流プラザふくちやま
出品　桑原仙溪

京都の６つの芸術分野（いけばな、工芸、写真、書、彫刻、日本画）の作品展が福知山市内３カ所で開催される。９日間の会期の最初の３日間にいけばな展を開催。京都いけばな協会が協力し、10人のいけばなを展示する。初日11時から書といけばなのコラボライブもある。

他分野の展示は、佐藤太清記念美術館、丹波生活衣館ギャラリーで９月30日まで観覧できる。

ブルーベリー

〈９頁の花〉　仙溪

花型　生花　草型
花材　ブルーベリー（躑躅科）
花器　銅薄端

名古屋の先生から庭で育ったブルーベリーを頂いたので、生花にいけてみた。実は熟すと落ちやすい。青いうちは水揚げも良く、いけて３週間以上経つがまだまだ大丈夫だ。

横から見た奥行き

紅花（べにばな）

〈10頁上の花〉　仙溪

花材　木苺（キイチゴ）
　　透かし百合（百合科）
　　紅花（菊科）
花器　陶花瓶（伊藤典哲作）

ベニバナはエジプト原産で紅色染料として4～5世紀に渡来した。先端の花を集めて利用するので、末摘（すえつむ）花（はな）と呼ばれた。

スカシユリの黄色とよく似合う。

横から見た奥行き

祇園祭にいける

〈10頁下の花〉 仙溪

花材　七竈（薔薇科）
　　檜扇（菖蒲科）
　　鉄線2色（金鳳花科）
花器　焦茶色陶水盤

今年は「京料理 田ごと本店」に躍動感のある立派なヒオウギをいけた。ナナカマドの紅葉と白と紫のテッセン。猛暑の中でも元気な花でお迎えを、の気持ちを込めて。

唐松草（からまつそう）

〈11頁の花〉 櫻子

花材　唐松草（金鳳花（きんぽうげ）科）
　　女郎花（おみなえし）（女郎花科）
　　スプレー菊（菊科）
花器　陶花瓶

カラマツソウは、キンポウゲ科の植物で、繊細な白い花弁が丸く集まって咲く姿が唐松の葉を連想させる珍しい日本固有の花。葉がオダマキソウのような優しい形をしている。

横から見た奥行き

松明花（たいまつばな）

仙溪

花材　山帰来（百合科）
　　鶏頭（莧科）
　　松明花（紫蘇科）
花器　陶花瓶

この赤い花は、タイマツバナ、モナルダ、ベルガモット、どの名前で呼ぼうか迷ってしまう。あと、ヤグルマハッカとも呼ぶ。北アメリカ原産のシソ科の多年草で、ハーブティーなどに利用される。赤花の他に白、紫、ピンクなどの花色がある。

去年も今年も、ちょうど祇園祭の頃にいけている。夏祭りの活気に、赤い炎のような花がよく似合うが、この伸びやかな姿は、特別に栽培されたものである。力のある花はいいものだ。

竹の根株のような花器にサンキライ、ケイトウ、タイマツバナをいけた。自然の伊吹に元気をもらえる。

日本の華道を紹介する番組
「花 知道答案 中日名師插花課」

中国のインターネットサイト「豆瓣（どうばん）」の情報番組「豆瓣時間」に協力させてもらった。日中の華道家のいけばなを花材や器、道具の紹介から、いける過程や技術、心得などを動画で紹介する。12人の40作品を視る対価は298元（約5千円）。文化をちゃんと伝えたいという中国スタッフの真面目さに敬意を表したい。

番組制作＝活字文化・日刻。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019年
8月号
No.674

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

いけばなインターナショナル京都チャプター例会

会期　6月18日㈫
会場　京都ブライトンホテル
講師　桑原櫻子
助手　桑原健一郎　滝本慶由
　　二井慶博　島慶和

「初夏の出逢い花に想いをよせて　万葉集の花をいける」

新しい時代、令和が幕を開けました。奈良時代に完成した日本に現存する最古の歌集「万葉集」を典拠とする元号は初めてです。万葉の花を詠んだ美しい歌を、花と共にご覧いただきました。　櫻子

キキョウ

朝顔は　朝露おひて　咲くといへど
夕かげにこそ　咲きまさりけれ

朝顔（おそらく桔梗のこと）は朝露を受けて咲くというけれども、夕方の光の中でこそ、なお一層その美しさが際立つものなのですね。

写真②　七竈（ななかまど）　桔梗（ききょう）　撫子（なでしこ）
陶花器（幾左田（きさだ）昌宏作）

アジサイ

紫陽花の　八重咲くごとく　弥つ代にを　いませわが背子　見つつ偲はむ　　橘諸兄

アジサイの花が幾重にも重なって美しく咲いているこの佳き日。あなた様にはこれからも末永くお元気でご繁栄されますようにお祈りしています。これからもアジサイを見る度にあなたを想っています。

写真③　珍至梅（ちんしばい）　紫陽花（あじさい）
竹島百合（たけしまゆり）
手付大籠（公長斎小菅）

ハス

ひさかたの　雨も降らぬか　蓮葉に
溜まれる水の　玉に似たる見む

雨が降らないかしら、ハスの葉に溜まった水が玉のようにきら

めくのを見たいなあ

写真④　蓮（はす）　縞葦（しまあし）
ガラス花器

ユリ

道の辺の　草深百合の　花笑みに
笑みしがからに　妻と言ふべしや

道端の草の茂みのユリのように微笑んだだけなのに、（あなたは私の事を）妻だと言うのでしょうか、そうではないですね。

写真⑤　横縞太藺（よこしまふとい）　笹百合（ささゆり）
下野（しもつけ）　半夏生（はんげしょう）（半化粧）
青白磁蛙耳花器（伊東陶山作）

イヌビワ（ちち）

ちちの実の　父の命　ははそ葉の
母の命　おぼろかに　心尽くして
思ふらむ　その子なれやも　ますらをや　空しくあるべき・・・・・

父母が心を尽くして思っておられるような、そんな子供であるのだろうか、武勇で後の世に語りつがれるようにならなければ

写真⑥　枇杷（びわ）（犬枇杷（いぬびわ）とは別の木）　鉄線（てっせん）数種
陶花瓶（加藤敏雄作）

ハギ

我が衣　摺れるにはあらず　高松の
野辺行きしかば萩の摺れるぞ

私の衣はわざわざ染めたのではありません。高松の野辺（ハギの名所）を行くうちにハギの花の色に染まったのです。

写真①無双萩（むそうはぎ）の着物を着て歌の世界を花と話でお伝えしました。

・

和歌に詠まれた花の世界を、女性の視点でドラマチックに紹介。万葉人に親しみを感じる楽しいデモンストレーションだった。仙溪

粉青沙器にいける

〈4頁の花〉 仙溪

花材　矢筈薄（稲科）
　　山紫陽花（紫陽花科）
花器　粉青沙器（崔龍熙作）

親の親がどんな人物だったのか、そんなルーツを調べて教えてくれるテレビ番組がある。ご先祖様の生きざまを知り、もっとも大切な事に改めて気付くのだ。

アートの世界でも自分のルーツとどのように関わるかは大きな問題だ。崔龍熙さんは京都の近藤高弘氏のもとで修行した後、今は自身のルーツである韓国の粉青沙器を研究されている。粉青沙器は李氏朝鮮時代前半に生まれた焼き物で、のちに白磁が作られだすと姿を消すが、日本では「三島」「刷毛目」「粉引」などと呼ばれて珍重され現在に至っている。崔さんは本来の制作技法にこだわることで、韓国の焼き物のルーツを辿り始めた。

彼の作品に季節の花をいけてみた。拙いけれど素朴で初々しい花になった。

ハス

〈表紙の花〉　健一郎

花材　蓮（蓮科）
　　羊歯（羊歯類）
花器　ガラス花器

共感覚：ある刺激に対して通常の感覚だけでなく異なる種類の感覚をも生じさせる一部の人に見られる特殊な知覚現象である。

こう言った特殊能力には憧れる。音を聞き形を思い浮かべたり、文字に色を感じたりといった言わば特殊な能力である。人にもよるがこの共感覚にはある程度の規則性があるので、いくつか答えを聞いているとなんとなくではあるが予想できるのである。予想が外れた後の回答と解説は、同じ感覚を有していない私からすると不気味な説得力があるのだ。

細工ものを作るときに頼っている手先が器用な知り合いが書いた絵を見て欲しい。私の生けた作品がこう見えて仕方がないらしい。もちろん私がハスに抱く思いなんて関係がない。いけばながエイリアンみたく見える共感覚はさほど羨ましくないが、いけばなの解釈の広さと共に可能性を感じた。

横から見た奥行き

11人の僕

健一郎

小学生の頃、人より少しサッカーが得意だった私はチームメイトに対して腹を立てていた。僕が11人いたら勝てるのに。そんな時、母は私に言った。「あんたはよその子と違うし、よその子もあんたとは違うやろ？」一年に二、三回はふと思い出させられる言葉だ。その後も表現を変えて何回も言われることになる。「世界中あんたしかいいひんかったら牛が絶滅してしまうわ！」「あんたみたいにやかましいのが2人になることすら想像したないわ。」散々な言われようだ。

中学校を卒業する頃になってやっと言葉の意味がわかった。高校の進学の時である。

小学校の頃から勉強は得意ではなく、私の通知表を見た母も、体育の成績以外は特に触れないでいてくれた。むしろ体育の成績ばかり認めてもらえるので運動が好きなのも相まって益々精が出た。そんな運動バカは算数や国語などの悪い成績は気にしておらず、いつも成績表を誇らしげに見せていた。高校の進学のタイミングで意識した通知表。初めて自分に短所があることに気がついた。

自分の短所を認識できるようになると自分の中で、「あんたはよその子と違うし、よその子もあんたとは違うやろ？」という言葉が腑に落ちた。するとなぜか、人の見え方が一気に変わった。障がい者の人を見かけても、可哀想だと思わなくなったのだ。「障害者の方たちは私たちとは違って普通にできることが出来ないから助けてあげなさい。」そのように小学校では習った記憶がある。だが私は障がいのある人を見かけても、特別な感情をもたなくなってしまった。というよりは過剰な意識をしなくなったとも言えるかもしれない。電車で他の人に席をゆずる事との違いがよく分からないのだ。皆んなが意識するほど大きな差があるようにはとても見えなくなった。

現在、認知症の人しか入れない施設で介護の職に従事している。それが楽しくて仕方がない。「お兄ちゃん楽しそうやね」「お兄ちゃん幸せそうやね」利用者の人は会う度に、新鮮な目で評価を下さる。

認知症の人は、よく物を忘れてしまう。主に短期記憶がおぼつかない。ついさっきお昼ご飯を食べたのに、まだ食べてないとクレームを受けることにも、もう慣れた。お昼ご飯を食べていないと言っている人に「さっき食べてたでしょ？」なんて言うものなら大変なことになる。「お腹が空いていますか」と尋ねる方がよっぽどスムーズに話の折り合いがつく。前者と後者の違いは何か。前者は認知症の人が感じていることではなく、事実に目を向けている。後者は事実ではなく認知症の人が感じていることを受け入れ、共有の事実として話を進めているのだ。

認知症の症状がない人との会話でも、話が平行線のまま交わることがない光景をよく目にする。自分が話したい事を話している人にその傾向がある。相手が話して欲しいことを感じ取りながら話す事が、会話の基本だと今のところ考えている。ただ単に気を遣って遠慮しながら話す言葉は、結局は自分の事しか考えていず、相手に迷惑をかける。なので簡単そうで難しい事ではあるが相手に気持ちを向けて話す鍛錬にはもってこいだ。

人はその場にあった適応行動をする。先ほどの昼食の例で考えると、お昼ご飯を食べていないからお昼ご飯の要求をするのだ。何も不思議なことはない。これも認知症の人だけに当てはまる問題ではないと思う。症状がない人の場合も、勘違いや思い込みが入り混じって会話をする事がよくある。言葉の定義があやふやな場合もあるし、物事の認識の差異から生じる場合もある。とはいっても、認知症の症状が進んでいる人はその誤差の程度は確かに大きい。だが、誰しもが思い込みや、勘違いの中で生きている。もし、この思い込みや勘違いの中で生きていない人がいれば、それが勘違いである。人間としての本質は同じである。私はよその子と違うし、よその子は私とは違うのである。

今年の祇園祭後祭の巡行で 浄妙山 鬮改めを健一郎がさせていただいた

立花秘傳抄　三

草之部（つづき）

犬子草

祝言。水際。

古歌

えのこ草おのかころころほに出て秋置露の玉やとるらん

濵木綿

祝言。水際。

蘭

祝言。前置の上まで。

和名集、水香。本草、沢蘭。

藤ばかま

祝言。中段。

通用にあらず、横へ出ず。

第二十八図

立花　梅除真

除真の内草の花形　中塚半之丞

苔　梅　嫩　松　蘇鉄　椿　柘植

水仙

蘇鉄が請、胴、控枝に使われた珍しい立花。紅梅、水仙、白椿が色を添え、真に苔木（梅）を大きく使うことで、蘇鉄の存在を生き生きと際立たせている。

正心の真後ろに立ち昇る傘松も珍しい見越の立て方で、それによって蘇鉄の葉の働きが強調されている。

古歌

朝まだき誰きてみよとふちばかま玉ぬく
露のさかりしつらん

鼠尾草（みそはぎ）

非祝言。水際より控枝まであがる。

宿魂草（しゅくこんそう）。

古歌

誰もたたけふや折らん年毎に水かけ草の
露のまにまに

龍膽（りんどう）

非祝言。水際。

一説通用、一説に通用にあらず。

本草綱目にいう、龍葵の如し、味苦くして胆（たん）の如し、因んで名となす。俗に草龍膽と呼ぶ。又云う山龍膽あり、葉霜雪に枯れず。

和名、くだに。おもひ草。

龍膽、熊笹に取り合いよし。前置の時かならず用いる。

よろいとおし

第五十九図

立花　やつで除真

西村松庵

やつで　松　菊　柘植　熊笹　嫩

著我　狗子柳　銀杏

ヤツデが真と胴に使われている。他の役枝がヤツデの大きな葉の広がりと同化してしまわないように、異形の松と菊で副、請をつくり、控枝の玉形の柘植でぎゅっと全体を引き締めている。

非祝言。水際、控枝によし。

白芷（よろいとおし）。

唐車前（とうおおばこ）

祝言。水際、前置にも用いる。

茉苡（おおばこ）（詩経）。

あわ雪

非祝言。水際より前置の上まで上る。

花づる

祝言。上中、心にならず。

この花近代出て立花の賞翫となれり。請、副、つや、あしらいもっとも美なり。これ鳥かぶとの変じたるものか。

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）
※立花図転載
『華道古典名作選集　立華時勢粧』（思文閣出版刊）

第七十図

立花　芭蕉直真

桑原半兵衛

芭蕉　菊　小菊　松　梅擬　柘植　椿

檜　苔　夏はぜ　著莪

芭蕉（糸芭蕉？）の葉が真に5枚、あしらいに1枚使われている。上半分を芭蕉と菊の2種でまとめ、下半分を松や梅擬などでしっかりと作り込んでいる。上下で景色をがらりと変えているところに、芭蕉への特別な思いを感じる。かなり大型の立花と思われる。

京都いけばなプレゼンテーション2019 やっぱりすごいゾ！いけばな小品いけばな展

会期　6月7日(金)～10日(月)
会場　京都芸術センター

桑原仙溪　（写真㊤）

花材　乙女百合（おとめゆり）
　　紅葉唐松（もみじからまつ）
　　白花 薊（あざみ）
　　満天星（どうだんつつじ）の枯枝
花器　ガラスの鳥（フィンランド製）

ガラスの鳥に小さな器を背負わせると置物が花器になる。物語を想像してもらえれば。

桑原健一郎　（写真㊦）

花材　山法師
　　煙の木
　　切り紙細工の蝶
花器　陶花器（近藤豊作）

遊び心を感じるいけばな。身近で、かつ洗練された細工を加えることで、いけばなの情景がより楽しいものになっている。

姫蒲の盛花

〈10頁の花〉　健一郎

花材　姫蒲（蒲科）
　　鶏頭（莧科）
　　擬宝珠（百合科）
花器　ガラス鉢

私の家では調子にのっていると必ず釘を刺される。釘にもかなりの数があるのだがその中に「『因幡の白うさぎ』のうさぎにならんときや」というものがある。調子にのって相手の寛大さにつけ込んでいるとワニに体の皮膚をズル剥けにされるらしい。

古事記にのっているだけあって説得力は抜群だ。時間と忘却の風化にさらされ洗練されたモノの価値は、時代を追うごとに増していくばかりだ。

丸葉の木の生花

〈11頁の花〉　健一郎

花型　生花　二種挿し　副流し
花材　丸葉の木（満作科）
　　穂咲下野（薔薇科）

花器　竹筒

「この辺も変わったなあ。外国人ばかりで日本やないみたいやわ。昔は良かったのに…」京都に住んでいるとお天気の話と同じくらい、あたりさわりが無く、会話のきっかけとしても使われる常套句（じょうとうく）だ。確かに過去はいいものだったと思う。その過去にもまた同じことを言っていたのではないだろうか。そしてその過去もきっと過去を懐かしんで羨ましがったに違いない。今の累積が過去になる。いつだって今が一番いいのではないだろうか。とは言っても時代の波にのみ込まれることなく残って欲しいものもある。

レモンだより

健一郎先生が立てた檜扇の立花の前で、お床を拝見するレモンちゃん。

桑原専慶流いけばなテキスト674号　2019年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com

ガラス器にいける

〈12頁の花〉　仙溪

花材　トルコ桔梗（竜胆科）
　　斑入虎杖（蓼科）

花器　ガラス花瓶（ヨーラン作）

フイリイタドリの葉が涼しげだったので鉢植で求め、一重のトルコキキョウと2種でいけた。流水を形に留めたような器はスウェーデンのガラス作家によるもので、器の中に花の茎を極力見せないようにいける。器の個性が生きたいけばなを目指したい。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020年
8月号
No.686

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

花と器

仙溪

このところ、いけばな誕生以前の花と器について考えている。

偶然見つけた石窟内部の写真には花瓶に蓮の花と葉が生き生きと挿されているように見える。その石窟が造られたのは527年。先祖とともに未来での幸せを強く願う思いが込められているようだ（8〜9頁）。

仏前に香を焚き、香水をかけ、香花を散らす祈りの姿が、インドからガンダーラ、敦煌、中国へと伝わる中で、「人の思い」が加わって、いつしか花と器を出逢わせたのだと想像している。

インドから伝わった蓮に対する清浄なイメージと、中国で先祖を尊ぶ象徴の祭器とが重なり合い、最初は花を散らす代わりに空の器に花を入れたのがきっかけで、香水と花を共に供えることを思いつき、器に水を満たして花を挿すことになったのではないだろうか。

いけばな誕生の背景に、壮大な人類のロマンを感じている。

鉄線の生花

〈2頁の花〉　仙溪

花材　鉄線3色（金鳳花科）
　　苔木
花器　耳付コンポート（宇野仁松作）

テッセンは自立しないので扱いが

難しい。けれども頼れる場所を与えると、生き生きと咲いてくれる強さを持っている。

苔木を土台にしてテッセンをもたせかけながら生花にした。父から教わった私の好きないけ方だ。

苔木の風格も生かせる器を選んだ。

温帯に育つバショウ

〈3頁の花〉 櫻子

花材　糸芭蕉（芭蕉科）
　　鉄砲百合「新美白」（百合科）
　　紫陽花（紫陽花科）
花器　染付深鉢

こんなに大きな葉を見ると、さぞかし暑い地方から来たのかと思ってしまう。

このイトバショウは別名リュウキュウバショウで、繊維を取るために沖縄で多く育てられてきた。バナナは熱帯性だが、イトバショウは温帯性なので京都でもよく見かける。

白いユリとアジサイを合わせた。染付けの大鉢にいけると花の藍色と馴染んでとても涼しそう。

朝鮮槙の生花

〈4頁の花〉　仙溪

花型　生花　行型
花材　朝鮮槙（犬槙科）
花器　陶花瓶（伊藤典哲作）

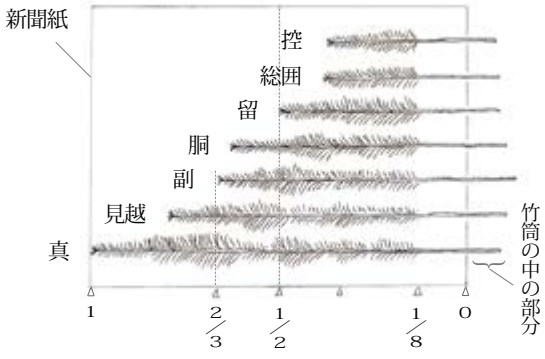
8月にいける生花といえばチョウセンマキで、長持ちするのが有難い。チョウセンマキはイヌガヤの変種から作り出された園芸品種で、日本にも朝鮮半島にも自生は無い。日本固有の栽培品種だそうだ。

横から見た奥行き

◎行の花型

又木配りの
かけ方と
役枝の場所

それぞれの枝の長さは左図のように新聞紙を基準にするといい。



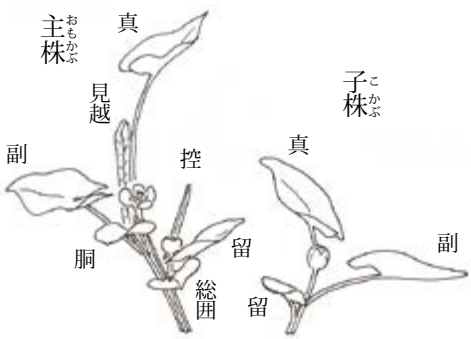
河骨（こうほね）の株分け生花

〈5頁の花〉　仙溪

花型　株分け生花
花材　河骨（睡蓮科）
花器　足付陶水盤（伊藤典哲作）

コウホネは池や沼、流れのゆるい小川などのやや浅い水底から生える。泥の中で横に伸びる白い根茎を白骨に見立てた名前だ。黄色い花が水辺の妖精のように咲く。

コウホネは必ず水揚げポンプで水を注入してからいけるが、長くはもたない。それでもいけたくなる魅力がある。



涼やかな器

〈6頁の花〉　仙溪

花材　葉団扇楓（楓科）
　　透かし百合（百合科）
　　ベル鉄線（金鳳花科）
花器　青白磁花瓶（市川博一作）

涼を感じる花材にはフトイ、アレカヤシなどのように、風が抜けていくようなものが思い浮かぶが、爽やかな緑の葉をみずみずしくいけるのもいい。

そして、涼しげな風を感じるようにいけたい。

作例では、まず見るからに涼やかな器を選んでいる。青白磁の器は夏にこそ使いたい。淡い水色の表面は雪解け水を連想させる。明るい緑の葉が良く映える。

まずカエデの青葉を広げ、ベルテッセンを風を感じるように前へ出す。そこへ、鮮やかな黄色のスカシユリを覗かせた。スカシユリの強さが加わることで、カエデが軽やか見えてくれる。

花筏とイガグリスゲ

〈表紙の花〉　健一郎

花材　花筏（花筏科）
　　毬栗菅（蚊帳吊草科）
花器　陶花瓶（清水美菜子作）

どちらも個性的な花である。ハナイカダは花の真ん中あたりに花をつけ、実になると写真のようになる。一度見たら忘れられない珍しい植物である。

イガグリスゲは北米原産でトゲトゲの実と真っ直ぐに伸びている葉とのコントラストが魅力的である。

ヒマワリを花屋さんに買いに行ったはずだったが、この2つの鉢を持って帰ってきた。想定外の幸運な誤算である。2種でもよかったのだが、桔梗を添えると緑が際立つ。

横から見た奥行き

水面を見せる

〈7頁の花〉　仙溪

花材　姫檜扇水仙（菖蒲科）
　　洋種山牛蒡（山牛蒡科）
花器　陶深鉢（ドマーニ製）

ヒメヒオウギズイセン（ヒメヒオウギとも呼んでいる）は南アフリカ原産の多年草。学名はクロコスミアで、明治の中頃に日本に入ったそうだが、性質が強いので各地で野生化しているらしい。

ちなみに同じく南アフリカ原産で、ワトソニアという植物がヒオウギズイセンと呼ばれているので混同しないようにしよう。

立派なヒメヒオウギズイセンが手に入ったので、ヨウシュヤマゴボウ（アメリカヤマゴボウとも呼ぶ）と2種でいけた。

この器は鉢カバーで、小さなバケツを置いた上に黒いフェルトを巻いた板を乗せ、その上に剣山を置いていけている。いけた後も剣山をフェルトで隠すと、水面を美しく見せられる。

仏教遺跡に見る花と瓶　②

仙溪

中国地域への最初の仏教伝来は1世紀頃だが、本格的に広まるのは4世紀以降で、5世紀の南北朝の時代には南北ともに多くの仏教寺院を建て、龍門や雲崗などの石窟寺院もつくられた。

6世紀に入ると内乱による廃仏廃寺の苦難の時を経た後、中国統一を果たした隋の文帝は新たに仏教で国を治めるべく中国全土に舎利塔を建てた。またこの時代に多くの宗派も誕生する。

そして7世紀、唐の時代。仏教が国による制限を受ける中、国禁を破って玄奘三蔵がインド（天竺）へ旅に出て多くの仏典を請来したことがその後の東アジア仏教の基盤となった。

日本には538年（552年説もある）に百済の聖明王から欽明天皇に仏像などが贈られたのが最初の仏教伝来とされている。

中国、洛陽の南方にある龍門石窟は南北朝時代の5世紀末から400年にわたって造営され、約10万体の仏像がある。北魏の孝明帝の時代に造られた皇甫公窟（527年完成）には、花瓶（？）に蓮の花と葉が立てられた浮彫が。器の下にも茎の足のようなものが見える。空中を漂っているようだ。

①

出典：http://art.ifeng.com/2017/0731/3363934.shtml

②

出典：http://art.ifeng.com/2017/0731/3363934.shtml

皇甫公窟は北朝・北魏の孝明帝（在位515～528）とその皇后のつくった一対洞窟。壁面には多数の仏龕をうがち、三尊仏、小仏、飛天、眷族（皇帝の一族）などが彫られて、全体で一つの物語を見ているようだ（図②）。図③は蓮の花を持って進む皇族たちか。

③

出典：https://kknews.cc/zh-cn/travel/rr9394n.html

その２００年後、華厳経（仏教経典の一つ）に感銘を受けた聖武天皇が、東大寺大仏開眼供養を果たす。

そもそも釈尊の悟りは一つでも、教えを請う相手に合わせて様々に発せられた言葉が、弟子達によって解釈され口承され、のちに多くの経典となった。そして各地に伝わる過程においても、それぞれの民族的な背景によって、微妙に受け止め方や表現の仕方は変化する。

中国においても、朝鮮、日本においても、仏教伝来は在野の信仰、思想、慣習とのせめぎ合いと融合があったと考えられる。

ネットで検索するうちに、ある画像に目が釘付けとなった。なんと花瓶に蓮が生けられたレリーフが６世紀初頭の中国石窟に！（図①）。

色々調べると、すでに古代インドで、命の源泉である水が貯えられた壺から蓮が生え出る「満瓶」と呼ばれる装飾文があり、宇宙の生成、豊穣多産を現すそうだ。

図①の器は「尊」に似ている。尊は古代中国で歴代の王が祖先の廟に酒を供えた祭器であることを思えば、蓮の咲く天界に先祖と共に再生し、一族の繁栄を願う気持ちが読み取れる。

この蓮を挿した（ように見える）図像は、法隆寺金堂天井等の装飾や（図⑤）、東大寺大仏開眼供養の花瓶（図⑥⑦）などに繋がっているようで、やがて日本のいけばなへと結びつく痕跡の一つを発見した思いでいる。

④

出典：http://art.ifeng.com/2017/0731/3363934.shtml

いろいろな開花の状態が彫り分けられている。中央の蓮の花には火焔宝珠のような中に小さな仏が乗っている。

⑤

出典：http://avantdoublier.blogspot.com/2014/09/blog-post_26.html

法隆寺金堂西の間天蓋内部の火炎宝珠を戴く蓮唐草文。国宝法隆寺金堂展図録より。

⑥

出典：https://www.wikiwand.com/ja/ 東大寺盧舎那仏像

⑦

出典：https://www.wikiwand.com/ja/ 東大寺盧舎那仏像

奈良の華厳宗大本山東大寺に伝わる「東大寺大仏縁起絵巻」（１５３６年）は３巻からなり、東大寺の創建、大仏の鋳造、開眼供養や鎌倉時代の再建の様子などが描かれている。開眼供養の場面には蓮の花と葉（の造花）が挿された一対の金銅の花瓶を見ることができる。７５２年４月９日の様子だが、太陽暦でいうと５月26日で、ハスの開花には一月早い。

『こだわり』

健一郎

私には最強の家元になるという大きな目標があるのだが、日を追うごとに課題が増え続け、ただでさえ遠かった最強の家元がどんどん離れていく。いや、私と理想像の距離を測り違えていたのだろうか。明確な定義がしっかりとしていないことが、最強の家元になる事を難しくさせているのかもしれない。そして、答えのない目標は私を楽しくさせる。

私が思い描く最強の家元は誰かに頼まれたものではないため、自分さえ納得できればいい。つまり、拘る事ができる。自己満足のようなもので自分が納得できるまで花と向き合えることが出来たらいい。そしてその向き合う姿勢をいけばな教室を通して伝えている。こんな幸せで有難い事はそうそうないが、果たしてお弟子さんが何を得たいのかが未だによく分からないでいる。私の個人の欲望が満たされているだけな気がしている。

生け花を教えるにあたり、いけばなとは何かという事を考えるようにしている。現代、過去、これからのいけばなの解釈、美術的な、芸術的な位置づけ、考えれば考えるほど何かわからなくなる。何かに専門的な人と話すと、いけばなを知らない人の方が詳しいのではないかと思う時もある。花を生けることに専念すると、花を人に伝えられないのではないかと考えている。専門的な事を知らない人に教えるには他の知識がふんだんにいるらしい。偏愛ともとれる、こだわりのある狭い世界観は人には理解しがたい。

いけばな以外の事にも興味があり、調べ物をしていると、いけばなについての考えが深まることがよくある。ふとした偶然をきっかけに、いけばなについてより本質に迫った気になるのだ。

花と向き合っている時だけが花と向き合っている時間ではない。花を意識して他の物事と向き合うと何をしていても花と向き合っている事になるのだ。花だけと向き合っているときには見つけられなかった花の姿が発見できる。一時的ではあるが、こだわりからの解放と言うこともできる。

こんな僕も23にして結婚をしたい人が見つかり、相手の承諾を無事、得られたので結婚をした。入籍をする前に近所のマンションを借りてそこでしばらく生活をしていた。両家ともに少なくとも2、3年から10年は2人だけで生活をしていくだろうと思っていたようだが、私のわがままにより5ヶ月で家元宅で暮らす事になった。春から2人で暮らし始め夏中に自分達のマンションの退居をしたわけである。二世帯での生活を承認してくれた事には感謝しきれない。

僕の中で常に考えていないといけない問題がある。妻と自分の時間のバランスだ。最強の家元になるための時間を欲すれば欲するほどに妻との時間は無くなっていく。最強の家元である前に桑原健一郎である。

妻という日常の延長線上に最強の家元がある事を自覚しても、妻と見つめ合っているだけでは何も起こらない。自己研鑽に使う時間も大好きな時間なのでバランスを取るよう意識をしている。家族は人間が社会生活を送る上で一番小さく、各個人を形成するものである。自分が不安定な状態で人に働きかけることはできない。自分を満たす事から社会とのつながりはスタートするのだ。

日常の積み重ねが個人を形成することを考えると日々をどう過ごすかが大切なわけである。妻との時間は毎日が楽しい。

妻と一緒に住む前から分かってはいたが、いや、ここまであろう事とは分かっていなかったのだが、お互いに我がなんと強い事か。5ヶ月の間に2人で茶碗や箸すら決められなかった。お互いに全く譲らない。お互いの正しい、好みを曲げない。まあ、折れられても張り合いがないのだが…。家元宅で晩御飯を食べていたことも原因としてあるが、方々を歩き回っても、2人共が納得できそうなものは置いていなかった。家元宅で暮らす2人の部屋のフローリングは取っ組み合いの喧嘩で決まり、キャンセルをした新婚旅行は行き先を決めるだけで1ヶ月程もめた。

そんな中でも互いに肉への執着心は特に強い。一緒に食べている時はお互いに肉に集中しているが、彼女の量以上の肉を食べる私を否定してくる。彼女は私の皿のお肉を食べるほどの胃袋を持ち合わせていないのである。初めの方は大きな声で食事の妨害をしてくるが、疲れて静かになったなと横に目をやるとお肉を食べる私を睨んでいるのだ。こんな楽しい時間はない。大きなことだけでなく小さなこと一つ一つで日々言い合いをしている。

こだわりとはその人が今まで生きてきた生活の積み重ねであり、その人らしさの集積である。他人の評価や目を気にするものではなく、自分の中にしかないものだ。

お互いがくだらない事にまでこだわりを持っているので相手に対して不満が生まれる。ただ、相手に対して持つその不満が、具体的であるため、その都度話し合う事で、優れた意見に従う事にしている。相手を想う気持ちが数えきれないほどの相手への否定を可能にしている。

同情や共感をするだけの夫婦像は私の理想としているものではない。生い立ち、経験の異なった相手に対して知らないで決めつけ、思い込んでしまう事は非常にもったいない。表面的な同情の共感ではなく、違った境遇の相手に想いを馳せ、考え、理解しようとする事で自分の世界が広がっていく。そしてそれをそうさせるのは相手への好奇心である。

私が、家元になった時に、同情や共感しかしない人が隣にいると、自分を俯瞰してみることができずにどんどん独りよがりの作品、人格になってしまうだろう。その事を考えると背筋がゾッとする。私の行く道の選択肢を広げ、間違っていたら強引にでも良い方向へ引っ張ってくれる人が横にいれば安心だ。私に客観的な視点を忘れさせないためにも、私を真っ向から否定してくれる存在がいてくれる事は非常に心強い。願わくは、お互いに違う事に興味を持ち、背中合わせで広い視野を持ってお互いの足りないところを補えるような関係であり、こだわりから解放され、究めることができれば最強の夫婦なのかもしれない。互いに別世界に専門性を帯びた先に何かが起こると考えている。2人が納得できるもの、認め合うものができるものはやはり、特別な気がする。

円と円の重なりの限りなく点に近い楕円の共通項で知り合った私たちは相手の知らない世界を知っている。相手から聞く話の全てが新鮮で勘違いもよく起こるが、間違いなく僕の人生を豊かにしてくれると確信している。ここまで周りくどく話したが結婚した理由は妻がただ横にいてくれる事が嬉しかったからだ。

桑原専慶流いけばなテキスト686号　2020年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

為せる業

仙溪

花材　七竈（薔薇科）
　　風船葛（無患子科）
　　夏櫨（鼯鼠科）
花器　陶花瓶

フウセンカズラはムクロジ科の蔓性植物。熱帯の植物で、夏に小さな白い花を咲かせ、風船状の実が蔓からぶら下がって愛らしい。この実が熟すと中の種にはハート型の白い模様が現れる。

ムクロジ科のムクロジは以前にテキスト630号でいけている。黒い実は数珠や羽子板の羽にも使われ、果皮は石鹸になる植物なので名前を覚えておきたい。

さて、このフウセンカズラをいけるには蔓を掛ける枝が要る。

ナツハゼにフウセンカズラを絡ませ、早くに紅葉したナナカマドを合わせた。

夏の緑と秋の紅。このような花材が花屋に売られているのは、日本の文化の為せる業だと感謝している。

横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021年
8月号
No.698

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

染付花瓶（そめつけかびん）

〈2頁の花〉　仙溪

花材　丸葉の木（満作科）
唐糸草（薔薇科）
瑠璃虎の尾
（胡麻の葉草科）

花器　染付花瓶

「染付」は、白色の胎土で成形した素地の上に酸化コバルトを主とした絵の具で模様を絵付けし、その上に透明釉をかけて高温焼成した陶磁器のことで、おもに磁器で、模様は藍青色に発色する。この絵の具の材料を呉須と呼ぶ。江戸時代初期に中国から日本の伊万里に伝わった。

染付の器には写実的な絵柄もあるが、花をいけるには自由奔放な筆致の模様の方がいい。素早い絵付けの闊達さが、いけた花の瑞々しさをより増してくれるように思う。

薄紅色と瑠璃色の夏草に、大らかな丸い葉とどっしりした染付の器が涼感を加えてくれた。

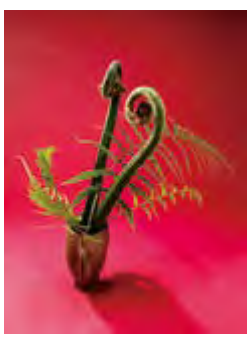
3億年のつきあい

〈3頁の花〉 健一郎

花材　ヘゴゼンマイ（ヘゴ科）
　　姫羊歯（ひめしだ）（姫羊歯科）
花器　耳付陶花器

湿気のある場所を好むシダ。夏になり花が減ると緑に目がいく。艶やかでその場で生き生きとしている。京都市内でいえば三室戸（みむろど）寺のシダが特別綺麗だった。紫陽花と石楠花（しゃくなげ）で有名なお寺であるがシダがとても印象に残っている。スマートフォンの待受にしてしばらく楽しんでいた。

今回シダと取り合わせたのはヘゴゼンマイ。やはりシダとの相性は抜群である。約3億年ほど前に全盛を迎え、その時以来の仲である。時代の括りとしては古世代石炭紀とされているがこれは、大量に生息したシダ類が石炭となりヒトの産業革命のきっかけになった事が由来している。プリミティブな器が原始的な空気をより強調してくれる。



テッポウユリ

〈4頁の花〉　仙溪

花材　木苺（薔薇科）
　　鈴薔薇の実（薔薇科）
　　鉄砲百合（百合科）

花器　焼締陶花瓶

毎年、ユリの品種改良がおこなわれていて、新しい品種に出会う楽しみがあるのは有り難いことだが、昔から親しんできた品種が栽培されなくなってしまうのは淋しいことだ。ササユリや関西のタメトモユリのように栽培が難しいものに加えて、カノコユリもほとんど見なくなってきた。カノコユリは俯く姿が敬遠されたのかもしれないが。

そんな中でもテッポウユリが現役で頑張ってくれているのは嬉しい。ユリと言えばテッポウユリなのだ。強くて美しいテッポウユリを今後もずっといけ続けたい。

コエビソウ

〈5頁の花〉　健一郎

花材　エンシクリア・セラタン（蘭科）
小海老草（狐の孫科）

花器　陶花瓶（前田保則作）

コエビソウはメキシコ原産のキツネノマゴ科の植物である。茶花にも使われることがあるそうだ。小海老草と呼ぶのでは印象が大きく変わる。一緒に取り合わせたのは、エンシクリア・セラタンというオンシジュームである。コエビソウと呼ばれるように綺麗にグラデーションした甲殻に目がいくがよくみると可憐な花を咲かせる。エンシクリア・セラタンと模様がそっくりだ。

横から見た奥行

夏の立花

〈6頁の花〉　仙溪

花型　除真立花（のきしん）
花材　夏櫨（なつはぜ）（躑躅（つつじ）科）
　　笹百合（ひおうぎ）（百合科）
　　檜扇（あやめ）（菖蒲科）
　　紫蘭（しらん）（蘭科）
　　桔梗（きちきょう）（桔梗科）
　　日向水木（ひゅうがみずき）（満作（まんさく）科）
　　玉川杜鵑草（たまがわほととぎす）（百合科）
　　河原撫子（かわらなでしこ）（撫子科）
　　紫陽花（あじさい）（紫陽花科）
花器　焼締（やきしめ）陶花瓶

稽古の見本に立てた立花が10日経っても元気なので、胴・流枝・控枝・前置をいけかえて写真に撮った（7月7日撮影）。

多くの木や草花が一つの器におさまって、なんともいえない風情が作られる。立花は実に不思議ないけばなだ。これからも植物たちによる調和の美を楽しみたい。

セフリジとアンスリウムの生花

〈7頁の花〉　健一郎

花型　株分け生花
花材　セフリジ（椰子科）
　　アンスリウム（里芋科）
花器　陶水盤

メキシコ原産のセフリジ、別名竹ヤシとも呼ばれている。節が竹と似ており、面白い植物だった。違和感なくお互いの個性が発揮できている。生花としていけると盛花や投げ入れでは見つけられなかった姿が見つかる。アンスリウムとセフリジのいい表情をみる事ができた。

横から見た奥行

『山登り』

健一郎

花は足で生ける。気に入っている言葉だ。街中に住んでいるのもあり季節の植物とは距離がある。私は特定の植物を大切に栽培されている神社やお寺をよく訪ねる。二、三日あれば日本ならある程度のところにまで行くことができる。最近は季節に合わせて山を選びそこでしか会えない植物の生息する場所まで訪ねている。

山に登ることはあまり好きでない。だが山にいるのは好きだ。山で見る植物も好きだ。4人で尾瀬に水芭蕉を見に行った時のことだが、急勾配な場所では家元が副家元の荷物を持ち登っていた。山登り自体を楽しんでいそうに見えたのは家元ぐらいである。「六月やのに桜が咲いてる!」「これはムシカリ?オカメノキかな?」みんなで山に生息する植物を見ながら登ると身体のしんどさはあまり気にならなかった。

私の山登りは花見の感覚に近いのかもしれない。会いたい植物に出会うための道である。登る回数が増えると、山に何かを感じる事が増えていき、山に対する信仰にも興味が出てきた。古くから信仰されている山や、面白い言い伝えのある土地には、何かがある気がしてならない。火のないところに煙は立たないというが、面白い伝承がある場所には何かがある。何かを感じ取る力が少しはついてきた気がする。

キリスト教文化圏では山や森は魔女、悪魔の住む忌むべき土地として切り開かれてきた。人が増えることで必要な土地も増えたのだと予想する。初めての山に入る時の気持ちはどのようなものであっただろう。私はキリスト文化圏の見せた反応は分からない怖さに対して素直な反応だと思った。だが全てを光の元に晒してしまうと未知の部分がなくなり、奥行きがなくなってしまうのではないかと私は思う。

海外のヒマラヤアルプスのような山脈とは異なり、日本の山は人里に近く、身近な存在である。豊かな水系を育み、人里に壊滅的な災害をもたらすこともある。人は山に対して畏怖し、信仰するようになったのではないだろうか。私はその場にいればしてしまうだろうと想像している。古代において、死後に人の魂は高いところにいくと考えられていたそうだ。山への信仰がそうさせたのか、魂が高いところに行く考えが先かは知らない。先祖は山へと還っていき、山から見守ってくれている。お正月やお盆などには、子孫たちと交流するために山から降りてくるという感覚は今にまで伝わる。

この間、三輪山の大神神社に訪れた。神を祀る本殿がなく、山そのものを拝む形になってる。三ツ鳥居をみることは叶わなかったが、いい空気を吸うことができた。人が創作した神と比べると原始的で自然な信仰だと感じた。中でも印象的だったのは太陽と空と山である。なんの飾り気もなく只々そこにあった。それがいい。昔は笹ゆりが自生し周辺にたくさん咲いていたらしく、それは、それは神秘的であっただろう。

お寺や教会などの宗教施設に入ると非現実的で、不思議な気持ちにさせられる。どれだけ現実から離れたかったのだろう。祈りや願いが複雑に絡み合っている。そして宗教施設が教えを厳かなものにする。その作用を人工物ではない、山や自然が担っているという事に対して興味がわいた。

日本独特の山に籠って厳しい修行をする修験者や山伏は、特異な自然環境の場に目をつけ、そこにふさわしい修行や儀礼を創出する。例えば、断崖の「覗き」は有名である。

森林限界を神仏の地と意味づけ、それらが精神的高揚をかきたてる。バンジージャンプの起源とされているバヌアツという国のナゴールと呼ばれる儀式は成人の儀式として有名である。自分の足に巻きつけるツタを自分で探し、自分達で組んだ30メートルの高さの櫓から飛び降りるというものである。私はこういった儀式や修行が好きであるが、嫌いな人がいることも承知している。

ある本で行者さんが以下のことを述べていた。

「行者は、精神異常と同じ。寒中の水が冷たいのも、火渡りの火傷が熱いのも知っているが、冷たい水をかぶり火の上を歩く。それを分かってやるのだ。まともな人なら正常な判断が冷静にできるからしない。行者はおおむね狂っている。」

私は自然に身体を預けることが、自然に少しでも近づくことができているのが嬉しくて、どこにでも飛び込んでいる。その度に言葉には、し難い経験をしてきた。それが霊感かと聞かれればそれは分からない。だが特別な体験であることは確かだ。これからも植物を求めたい好奇心と、もっと身体を自然に溶かしたいという欲求がある。

私は、自分なりの方法で自然と向き合いたいと思っている。さまざまな宗教が持つ形式化されたものは時代を追うごとに洗練されているとは思っているが、僕にはその原初や、初めの心を読み取る力がない。自分なりの方法で向き合おうと思う。滝に打たれたり、スカイダイビングや上半身裸でスノーボード。今箇条書きにしてみたが挙げだすとキリがなかった。

衝動的に身体を動かしたくなったものや、前もって準備が必要なものがある。中には行者の始まりの時代には体験できないようなものまである。今の時代にあった今の自然と向き合うことは私たちしかできない。流祖が昔を知り、今を知り、生み出した。そして今までの家元達はその生きる時代を知り、それぞれが生み出した。私は今五感を解放し今を知ろうとしている。とは言っても興味があってしたいことをして、毎日遊んでばかりなので頑張ってはいない。

縞すすき

〈表紙の花〉　櫻子

花材　縞薄（稲科）
　　アンスリウム数種
　　（里芋科）

花器　白磁扁平花器

縦ジマがはいるススキは縞薄。横ジマがはいるのは鷹の羽薄。

久しぶりにシマススキを見つけたので、アンスリウムを足元に固めてみた。

タカノハススキなら竹籠などに夏の草花と一緒にいけたいと思うが、シマススキは強靭な雰囲気なので洋花との取り合わせもいいかもしれない。

力強く立ちあがる葉もあり夏の夕立ちのよう。

今年の夏も無事乗り越えられますように。そんな事を願いながら少しでも長持ちしてくれるよう毎日水替えをしている。

横から見た奥行

京の花物語・檜扇展示会　京都

会期　第4期
　　7月23日(金)～25日(日)

会場　祇園祭ぎゃらりぃ
　　漢字ミュージアム1階

出品　桑原仙溪

花型　除真立花

花材　梅花躑躅（躑躅科）
　　檜扇（菖蒲科）
　　朝鮮槙（犬槇科）
　　仙翁（撫子科）
　　桔梗2種（桔梗科）
　　女郎花（女郎花科）
　　紫陽花「紅」（紫陽花科）
　　小葉の髄菜（髄菜科）
　　鳴子百合（百合科）

京都府花き振興ネットワークによる宮津産ヒオウギのPRイベントに、京都いけばな協会が協力して毎年7月の週末に2流派ずつがヒオウギのいけばなを展示している。各先生方の花とインタビューが後日数分のPR動画になって公開予定。

レモンちゃんとノカンゾウ。今年も咲くかな。（昨年8月撮影）

日本に来た満瓶　プルナ・カラサ

仙溪

これまで壺から蓮が生え出る図像「プルナ・カラサ（満瓶）」が古代のインドで生まれたことを見て来た。壺に満たされた水は生命の源であり、生え出るハスは力強い生命の象徴であった。

インド、中国、朝鮮、日本と仏教が伝わる中で、満瓶はどうなったのだろう。

仏教が伝わって150年頃の日本に、ハスが生え出る壺の図が存在していた。奈良国立博物館所蔵の国宝「刺繍釈迦如来説法図」（図③）に満瓶に似た図像をみつけた。（図①）。

丸い壺の口にハスの花と葉が見える。壺の飾りもインドのプルナ・カラサに似ている。今まさにハスが生まれ出たという感じがする。刺繍で表現されているのだが、7～8世紀頃の中国仏教に関わりを持ち、日本に伝わったものようだ。

とても高度な刺繍による仏画（繍仏または繍帳と呼ばれる）で、いつ何処で誰が作らせたのかの記録はない。

樹の下で腰掛ける赤い衣の如来が大きく描かれ、左右に菩薩たち、その上に奏楽天人たち、下方には俗人や比丘（仏教僧）が居並ぶ中で、中央に後ろ向きの女性が立っている。この図の解釈や製作地（日本か中国か）には様々な説があるようで、どの説が正しいのか分からないが、中国史上唯一の女帝である武則天（則天武后）が宮廷工房で作らせたとする大西磨希子氏（仏教大学教授）の説が興味深い。

武則天は690年に皇帝の座につく時、女帝出現を予言した経典があることを理由に自分の正当性を誇示したとされている。その時10人の沙門（仏教僧）の協力を得た記録があり、この図像と一致する。自分が理想的統治者であるというイメージを打ち出すために作らせた繍仏だとするのが大西氏の説だ。

702年に日本から遣唐使が長安を訪れ、武則天に拝謁した折に賜ったものと推定しておられる。他の説と比べてみて、一番説得力があるように思う。

後ろ向きの女性のとなりに、花が盛られた水盤（供花）を捧げ持つ僧がいる。武則天（後ろ向きの女性）は中央の弥勒仏（大西説による）に向かい、ハスの生え出る壺を右手に持っている。壺は青いガラス製だろうか。こちらは供花というよりも、清らかな水を弥勒仏に捧げている（もしくは授かった）ような感じだ。命を生み育む、生命の源としての水が、このドラマチックな場面に命を吹き込んでいるかのようだ。

よく似た図像が2～3世紀のインド仏教遺跡から見つかっている（図⑥）。神々がハスの生えた丸い壺を持ち、そこから天界の神聖な水を仏陀の居場所にそそぎ、祝福している。ここではハスの生えた壺は天界の清浄な水を表しているのだろう。

絵の解釈はともあれ、飛鳥時代末期の日本に、プルナ・カラサ（満瓶）に似た図像が存在したのだ。ハスの生える壺の図像は、当時の日本人に何かをもたらしたはずである。

国宝「刺繍釈迦如来説法図」の部分。
赤い紐飾りのある丸いガラス（？）の壺から、ハスの花と葉が出ている。いけばな的に見ると、水際立ったシンプルな生花（せいか）のようにも見える。

国宝「刺繍釈迦如来説法図」の部分。
後ろ向きの女性（大西説では武則天）がハスの生え出るガラス（？）の壺を釈迦如来（大西説では弥勒仏）に捧げ持っている。その上に植物が生い茂る池のようなものがあるが天界の泉か。手に持つ壺と関連があるのだろうか。

③

国宝「刺繍釈迦如来説法図」。京都・勧修寺（かじゅうじ）に伝えられ、「勧修寺繍帳（繍仏）」の名でも呼ばれる。縦207・横157cm。8世紀。奈良国立博物館。
出展①②③④⑤：https://www.narahaku.go.jp/collection/647-0.html

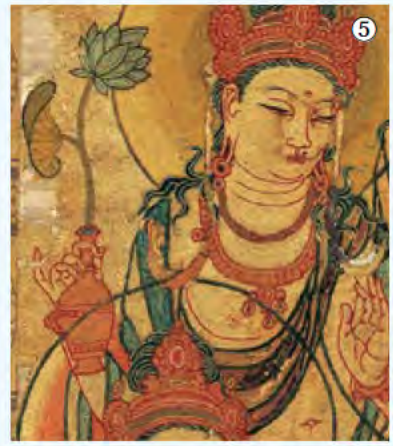
中央の釈迦如来（大西説では弥勒仏）を囲うように上から六仙人、十二奏楽天人、十四菩薩、十比丘、十二供養者が描かれている。大西説では弥勒菩薩が弥勒如来となって兜率天から現れるという下生信仰にかけて、現世を救う弥勒仏に自分をかさねた武則天の強い意図があったとされている。

座の背には壺の装飾が見える（図④）。天界の浄水が満ちている？。

④

〈情報〉
奈良国立博物館・特別展「奈良博三昧、至高の仏教美術コレクション」
前期展～8月15日に
国宝「刺繍釈迦如来説法図」が出品されています。
すべての作品が写真撮影可能だそうです。

⑤



国宝「刺繍釈迦如来説法図」の部分。菩薩の一人がハスが挿された水瓶（浄瓶）を持つ。花による供養を表すものか。唐時代の中国で、実際にこのような瓶花がいけられることもあったのだろうか。

【参考】
「奈良国立博物館所蔵　刺繍釈迦如来説法図の主題
－則天武后期の仏教美術－」大西磨希子
『仏教史学研究57巻』（仏教史学会）２０１５年3月

⑥

インド、アマラーヴァティー出土の石板。2～3世紀。「菩提樹の崇拝」神々がハスの花が咲く壺を持ち、聖なる木に天界の神聖な水を注いでいる。菩提樹＝仏陀を祝福するとともに、清浄な場所であることを表現しているのだろう。クリーブランド美術館。
出展⑥：https://vmis.jp/ArchiveCategories/gallery?search=amaravati

桑原専慶流いけばなテキスト698号　2021年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

お稽古の花

〈12頁の花〉　健一郎

花材　京鹿の子（薔薇科）
桔梗2種（桔梗科）
女郎花（女郎花科）
瑠璃虎の尾
（胡麻の葉草科）
鳴子百合（百合科）

花器　手付竹籠（公長斎小菅）

私のお稽古では年に数回は籠を使っている。桔梗と京鹿の子の数を増やしてテキスト用の花とした。今回高台寺の「おりおり」さんから頂いた籠のおとしがガラスで驚いた。撮影してみると宙に浮いているよう。モダンで夏らしく涼しげに入った。少しボリュームが過ぎる風にも見えるが賑やかで感じが良い。

横から見た奥行

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022年
8月号
No.710

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

源為朝（みなもとのためとも）

〈2頁の花〉　櫻子

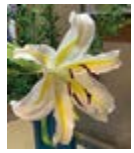
花材　作百合（さくゆり）（百合科）
　　唐糸草（からいとそう）（薔薇（ばら）科）
　　桔梗（ききょう）（桔梗科）

花器　陶花器（清水保孝作）

源為朝は平安時代末期の武将で、頼朝（よりとも）・義経（よしつね）兄弟の叔父にあたる。身長２ｍを超す豪傑で、九州・琉球・京都・伊豆諸島などに多くの伝説がある。

琉球のテッポウユリ、伊豆諸島のサクユリ、そして京都ではヤマユリ（の変種？）がそれぞれ為朝百合と呼ばれている。

蕾で買ったタメトモユリは赤い斑点の無いサクユリだった。写真で見たことはあるがいけるのは初めて。源為朝の伊豆での勇姿を想像して楽しんでいる。



サクユリ

ヤマユリ

夏のいけばな

〈5頁の花〉　健二郎

花材　アナナス
（パイナップル科）
ドラセナ・コンシンネ
（リュウゼツラン科）
アンスリウム
（里芋科）

花器　紺色ガラス水盤

年中あるが冬には魅力の感じなかった花だが夏になると心なしかきれいに感じる。私は熱帯の暑さと京都の暑さの違いを比べられないのだが、植物園の温室なんかで想像を膨らませている。とはいっても植物園も現地の音を出したりしてくれているので疑似的ではあるが体験できることはありがたいことである。植物の勢いをそのままに生けた。アナナスの立ち姿ではなく、咲いている花を見せたかったので大きく前へ倒した。重たかったため、錘（おもり）を後へおいている。京都にいながら熱帯の雰囲気を味わえるのはいいものだ。興味へのきっかけとなる。そしてそれは歳を重ねると記憶や、思い出としてそこにあるだろう。

夏の夜空

〈4頁の花〉　仙溪

花材　サンダーソニア
（百合科）
オーニソガラム
（百合科）
ネオレゲリア
（パイナップル科）
ピットスポラム
（海桐花科）

花器　陶コンポート

竹と紙で作られた小さな気球が夜空に昇って行く。天燈は昔の夜の通信手段だったものが、無病息災を祈る民族習慣となり今に伝わるそうだ。サンダーソニアは南アフリカ原産だが、花の姿からチャイニーズランタンリリィとも呼ばれる。

夏の夜空をイメージして、他に星の形をした花や葉を持つものを3種組みあわせていけてみた。

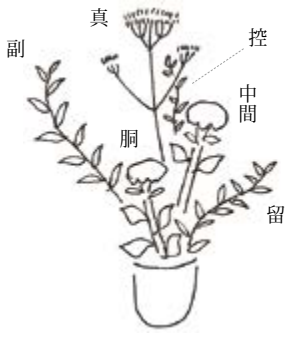
初歩の盛花
立体真主型

〈5頁の花〉　仙溪

花材　雪柳（薔薇科）
女郎花（女郎花科）
鶏頭（莧科）

花器　陶花器

細くて短いユキヤナギだったので、オミナエシを主材として高くいけ、ユキヤナギを添わせた。同じ取り合わせであっても、それぞれの姿に合わせた花型を考えていけたい。



木槿（むくげ）の生花

〈6頁の花〉　健一郎

花型　行型
花材　木槿（葵科）
花器　陶花器

土砂降りの雨の中脚立に登り、方ぼうに生えている木槿を切っていると副家元と菜月が騒がしい。「危ないで！足滑らさんときや！」「健ちゃん傘いらんか？」2人とも笑いながらふざけている。言葉だけ見ると、なんとできた人なのかと思うが、副家元は台所から、菜月は3メートルほど離れたところから雨傘をさし、動画を撮っている。あとはわー、と、きゃーしか聞こえなかった。木槿にとっても雨の中いい状態で切り取ることができた。庭師さんがお庭を掃除する前に、刈られてしまう木槿を生けておきたかった。祇園守りというこの木槿は夏の暑い時期から暑さが落ち着くまで、気張って咲いている。一日花で毎日花を咲かせ、毎日萎れる。今回の生花はきれいに咲いている状態のものと色が暗くなっている二つともの花を残した。景色として楽しんでいる。バック紙の色はやはりこの色だ、いつも見上げる空と共に目に映る木槿が綺麗だった。

梶（かじ）の生花

〈7頁の花〉　健二郎

花材　梶（桑科）
花器　銅薄端（うすばた）

2日ほど雨が続いた日の夕方。土砂降りの中、庭の梶を切った。約、1ヶ月ほど好き放題に伸びた梶を避けながら生活をしていた家族。もう切って飾ろうか。と何度も話が出たが、今回のテキストの撮影のために、置いていて欲しいと頼んでいた。

梶の木は神事と関連深く宮中では七夕の短冊として使用されていた。

梶の木をどうしてもお生花にしてこの竜の薄端銅器に生けたかったわけである。以前秋に乱れ菊一色の立花もこの銅器で立てたが、格があり、雰囲気を纏（まと）う植物と良く合っている。

七夕の日はお風呂上がりに、妻と筆ペンで願い事を書いた。そして一晩星に見せておいた。今年は珍しく晴れていて星を見ることができた。風呂上がりに庭でゆったりと過ごす2人の時間が気に入っている。翌朝、梶の葉を取りに行くと庭を散歩していた家元が「ええ願い事やな」と微笑んでいた。

『お花の倫理
（復興いけばな宣言）』

健一郎

光ウサギの研究は倫理的問題で中止されているときいた。動物のゆきすぎた研究は時として中止されることがあるらしいが、植物の改良が倫理的理由で中止された話を聞いたことがない。花粉のない百合や、青色の薔薇、虹色のカーネションの販売が当たり前のようにされている。光る花は存在し、観賞もされている。花と動物の違いは、時間の違いと死の曖昧さなのではないかと考えている。

人は人以前から数世紀単位の年月を重ねるたびに、自分達から始まり、少しずつ大切にできるものが拡張されているのではないだろうか。人は誰しも自分自身の存在に対して強い興味をもち思いやり、大切にする。そして家族、友人、隣人、組織、といった具合に少しずつその幅は広がる。そして大切にできる範囲は動物にまで及びそうだ。次は植物の番であると個人的には期待をしている。ただ生類憐みの令みたく、規則として決めるのではなく、各個人が納得した上で広がってほしい倫理観であって欲しい。動物の愛護に関しても強要はあまり効果的でないことは明らかであろう。強引さは、わだかまりをうむ。花の倫理はこれからゆっくりとおこればいい。そしてそれは石にまで広がるであろうと予測している。

岩や滝などの無機物にまで人と同じように霊的なものがあると信じられていた時代があった。狩猟生活をしていた時代である。自然の中に人がポツンといた時代だ。自然信仰が世界的に発生し、日本もその例外ではない。有機物、無機物問わず、全てのものの中に霊が宿っているという考えは、全ての物を大切にしていたからではないだろうか。有機物、無機物含めて、生きていく上で必要不可欠なものだったため、特別な気持ちを抱かせたのであろう。火を見たときに感じるあの不思議な感覚である。今、我々はその当時とは程遠い生活を送っている。

花が好きな人は趣味で園芸をしている人が多いらしい。趣味で花を育てている人は花を大切にしているように見える。園芸をしている花の好きな人たちからの話によると、わざわざ生け花をする必要は無いみたいだ。花が大切だから、花に対して余計なことはしたくないと言う。花は花瓶にさして楽しむだけで、余計なことはしたくないとの事。それが花を生けることだと僕は思うのだが。純粋にお花が好きな人は、その花に魅力を感じているのであって花を瓶の中で生かす行為は、いけばなではないという。

僕はいけばなをしようと思っている人でなく、花が好きな人とお花を生けて楽しんでいたいと考えている。良くも悪くも、いけばなには強いイメージがあるようだ。イメージが言葉の認識を限定させる。花の魅力を引き出すいけばなが広く知れ渡れば、お花が好きな人がお花を生けてみたくなるのではないだろうか。

絵が好きな人は絵を描けばいいと思う。花も花が好きな人に大切に生けられていてほしい。介護も人が好きな人が従事すべきだ。それぞれの現場でお花が、人がぞんざいに扱われているこ
とに強い憤りを感じている。まだ綺麗な花なのにも関わらず、いけばな展が終わると捨てられる花、真っ直ぐに育つきれいな植物をわざわざ折りまげ、切り裂いたりされる姿など、その植物がいい状態でないと胸が締め付けられる。人を人と思わない態度を取る職員。介護に関しては人権があり、法で守られているため、問題になるが、花を材料として見ている態度や、花の倫理は問題になりにくい。

人は人権で守られている。動物は新しく動物の福祉ができている。これからこの流れは加速するだろう。遺伝子の組み換えは人には行わないが、動物、植物には行う。遺伝子の偏りが絶滅リスクを高めている事にもなるが、遺伝子組み換えに対して反対しているわけではない。いま僕がこうして文章を書いている時間があるのも、その恩恵である。私が今生きている以上、簡単には否定できない。ただ、植物の倫理について、一度考えてみてほしいだけのことである。人に対するのと近い気持ちを動物に抱いた経験があるかもしれない。同じ感情を植物に抱く事は不可能ではないはずだ。少なくとも私が生けているお花に対しては強い好意を抱いている。

花も動物も人も、在ることの尊さをただ、守りたい。そして生き生きとしているのをながめているとなんだか心地がいい。

花の尊さを認め、花の内に入り溶け込むイメージで、花の生（なま）の魅力を引き出すのがいけばなだと思っている。誰が見ても心地がいい、生き生きとしていて、どこか温かみがある、そんな花を生けられるようになるのが今の目標であり、僕が理想とする花をいける人と花の倫理的関係である。

花の尊さを認め、
花を大切に扱い、
花の魅力を引き出し、
生き生きとした
温かみのある花をいける。

これが僕の
「復興いけばな宣言」である。

同花形之内流枝持立

花伝書を見る

立花　松除真（りっか　のきしん）
行の花形　流枝持立（ぎょう　ながしもちたて）
富春軒
松　苔　百合　仙翁花（せんのう）
著我（しゃが）　木槿（むくげ）　柘植（つげ）　嫩葉（わかば）
小羊歯（こしだ）　桔梗（ききょう）
（立花時勢粧・上）

目を引くのは低い出口から立ち昇る真と長く横へ伸びる流枝だが、真や流枝に添う百合もかなり長く見せている。ひょっとすると、百合を伸びやかに見せたくてこの花形が生まれたのかもしれない。

全体を見ると頭をもたげた龍のように見える。百合の花は開かれた龍の手、器は龍が守る玉。漲（みなぎ）る生命力を感じる不思議な立花である。

藤井隆也氏のアートと挿花

日本とドイツを拠点に創作活動を続けている藤井隆也さんは桑原専慶流の師範でもあります。

ドイツで拾ったオークの枯葉を拡大して描かれた絵が、京都鹿王院の襖絵として納められています。

昨年に続いて今年も9月に、鹿王院で新作屏風絵の発表を予定されています。期間中はオークの襖絵も見せていただけるそうです。

藤井さんは5年前からアトリエ近くの自然を撮った写真とともに、1日1点、器に花をいけてインスタグラムに投稿されています。

挿花の背景には藤井さんの作品が。自然の中に身を置いて生み出される模様と、実際の花が響きあっているような。是非一度覗いて見て下さい。

藤井隆也さんのインスタグラムには藤井さんの作品を背景に毎日のいけばなが（5年前から一日一作！）、、、。日本でもドイツでも、季節の一枝を仕事場にいけて楽しまれています。@fujiitakaya

第36回 祇園祭にいける いけばな展　　仙溪

今年は祇園祭巡行復活にあわせて、祇園祭いけばな展も復活開催され、私は創作京履物「伊と忠」さんを担当。店舗の一角を大きく空けて下さり、のびのびといける事が出来た。

店内には和装の履物やバッグが並び、職人さんの仕事も間近で拝見することができる。

花材／檜扇　グロリオサ　棕櫚竹　著莪の斑入り葉　　花器／染付鉢

京都市芸術文化協会賞 受賞　桑原仙溪

このたび、京都市芸術文化協会に所属し、芸術文化活動が特に顕著で、芸術文化の向上に多大の功労があったと認められる者として、表彰していただきました。

受賞に感謝し、今後一層、華道の研鑽ならびに発展に尽力してまいります。　仙溪

檜扇と七竈

〈表紙の花〉　仙溪

花材　檜扇（菖蒲科）
七竈（薔薇科）
ベル鉄線（金鳳花科）

花器　陶花器（竹内眞三郎作）

ヒオウギは古より邪気を払いのける力があるとされ、ナナカマドは火災除け、落雷除けの木とされた。そんなことを知らなくても、この2種の組みあわせには不思議な力が感じられる。白い器と赤い花が良く合っている。

岡山県本部主催
夏季研修会
華やいだ暮らしの設え

会期　7月3日(日)
会場　ライフパーク倉敷
　　大ホール
参加　約90名
内容　家元パフォーマンス
　　いけばな実習
　　「バラをいける」
　　いけばな展示
　　岡山県本部役員

疫病退散の願いをこめて、いきいきとした花からパワーをもらってもらおうと、岡山の先生方が力を合わせてイベントを開催して下さった。

舞台両端には手作りの床の間や応接セットが設置され、花の飾り方を解説。中央の大作は織姫と彦星にみたてた花を即興でいけた。

厄除けの檜扇にあやかって扇形の葉をもつ竹著莪、棕櫚竹を使い、邪気を吹き飛ばす力強いいけばなになった。

ササユリきれいだなー。

桑原専慶流いけばなテキスト710号　2022年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

ブドウのような

〈12頁の花〉　仙溪

花材　洋種山牛蒡（ようしゅやまごぼう）（菖蒲（あやめ）科）
　　オンシジウム（蘭科）
　　レナンセラ（蘭科）

花器　ガラス花器（クリシー）

セイヨウヤマゴボウは黒紫色に熟した実が潰れると服に色がつくので困る。けれども実が熟す前の枝は、野ブドウのように垂れ下がる実が面白く、白い小さな花もついていて、園芸植物には無い自然味がある。

アンティークのガラス花器に2種の蘭を添えていけると、エレガントないけばなになった。

テキスト撮影を見守るメイちゃん。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
8月号
No.722

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

軽く涼しく

〈2頁の花〉　櫻子

デンファレ・白色（蘭科）
蘭「さくら」（蘭科）
胡蝶蘭（こちょうらん）・オレンジ色（蘭科）
雪柳（薔薇（ばら）科）
ガラス花器（ヨーラン作）

ガラスのかたまりの様な重いガラス器。6キロの重さなのでしっかり持たないとすべり落としてしまいそうになる。

スウェーデンのコスタボダからよく持って帰って来れたなと花をいける度に感心する。

そんな器でも花は軽やかに飾りたい。

ユキヤナギを折らない様に慎重にためてランの花に添わせて垂れ下げて、空間を作りながら軽く軽くしなやかに。

ガラス器の中に茎を見せない事も涼しく感じる要素になると思う。

南米パンパ平原

〈3頁の花〉 仙溪

パンパスグラス（稲科）
向日葵（ひまわり）（菊科）
舟型陶花器

パンパスグラスの故郷、パンパ平原は、アルゼンチンの首都・ブエノスアイレスを中心にした半径約600キロの半円形の地域。起伏のない広大な平地で、関東平野の約60倍の大きさがあるという。

そんなところで育つパンパスグラスは強靱で雄大。細くて硬いノコギリのような葉を持ち、大きな花穂が高く立ち昇る。

作例のパンパスグラスは花穂が既に出た状態だったので、大きな花穂を主役に立てて足元にヒマワリを集めた。濃い色のヒマワリを多めにいけると、花穂が輝いて見える。

朝鮮槙（ちょうせんまき）の生花

〈4頁の花〉　仙溪

生花　草型　副流（そえ）し

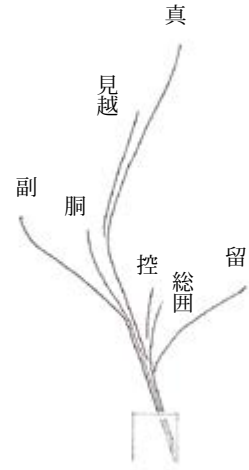
朝鮮槙（犬槇（いぬがや）科）

煤竹（すすだけ）竹筒

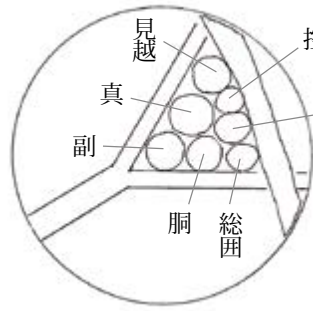
チョウセンマキはイヌガヤの変種から作り出された園芸品種で、日本にも朝鮮半島にも自生は無い。日本固有の栽培品種である。

真夏でも長持ちするのが有難いが、こまめに水を入れ替えたい。

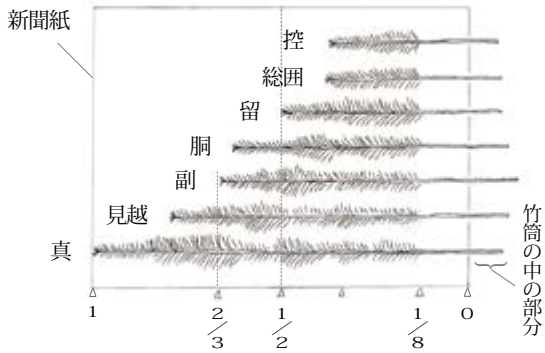
◎行の花型



又木配りのかけ方と役枝の場所（あくまでも一例として）



それぞれの枝の長さは左図のように新聞紙を基準にするといい。



お盆のお生花

〈5頁の花〉　健一郎

生花　草型　留流し
高野槙（槙科）
陶水盤

去年のお盆に合わせて手に入った高野槙をお生花にして撮影した。その後飾っておいたが、お弟子さんが「お盆で帰り損ねた方がこれでお帰りになれますね」と呟いていた。自分は衝動で生けていたのでその言葉が身に沁みた。見てもらえる環境があること、人がいることは本当に有難いことだとも感じた。

高野山の金剛峯寺に2年前、千住博画伯の『朧図』、『断崖図』を見に行った時に古木の高野槙を見て、その風格に圧倒された記憶がある。お盆用に出荷される高野槙は仏花になる際に真っ直ぐに生えたものが都合良いらしい。高野槙独特の葉が面白いが、留などの横枝を探すのは難しい。大きな枝を見つけたのでなんとか形になった。

苔蹴躅（こけつつじ）とのお生花

〈6頁の花〉　健一郎

生花　二種挿し
霧島躑躅（きりしまつつじ）（躑躅科）
鉄線（てっせん）（金鳳花（きんぽうげ）科）
ガラス鉢

苔躑躅はほとんど撓めることができない。どれほどの年月、どのような環境の中にいるとこうなるのだろう。この面白い枝ぶりを生かそうとお生花を選択した。お花屋さんで枝をみると、どうもお生花にはなりそうにない。格好にならなければ、魅力に感じた枝ぶりが見える投げ入れにしようと考えていた。家に持ち帰り、時間をかけてじっくりと見た。水につけたまま30分は眺めていただろう。見応えのある格好のよい躑躅だった。多少枝を捻って格好をつけてはいるものの、ほとんどそのままである。よくこんな躑躅があったものだ。鉄線を絡め、涼しげに。

一滴の滝

〈7頁の花〉　健一郎

松（松科）
鬼百合（百合科）
桔梗（きちょう）（桔梗科）
千手岩菲（せんじゅがんぴ）（撫子（なでしこ）科）
石
陶水盤

松の一年を見ていると面白い。堀川通りや御所によく出かけるので少しずつの変化を楽しんでいる。見ているだけでも良いものだがやはり生けてみると、また違った味わい方ができる。今回はお花屋さんで勢いよく伸びのある幼い松をもらってきた。普段見ている景色とは違うが、珍しい山野草とともに生けた。すると石の風景が浮かんだ。撮影の直前に石に一滴水を垂らした。山間に滝をみている。こんなことをしているのも良いものだ。豊かな遊びの時間である。

同砂之物

花伝書を見る

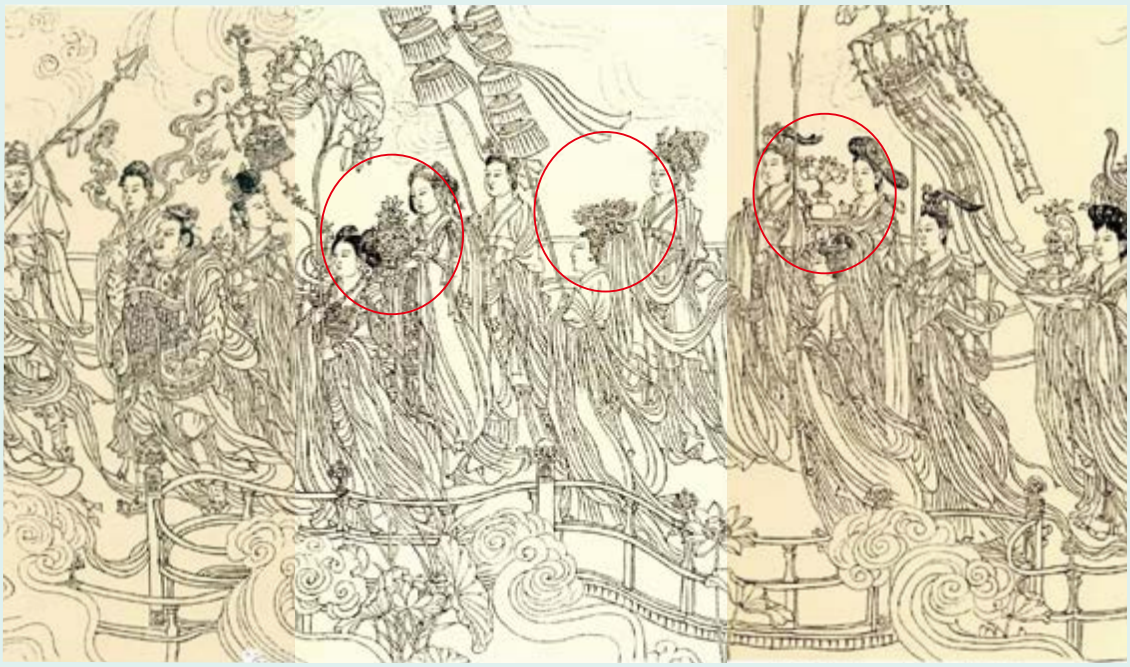
荷葉（蓮）一色（砂の物：初版）
寸松軒（初版：冨春軒）
蓮　蒲
（立花時勢粧・下　秘曲の図）

横に広い口をもつ砂鉢に立てる「砂物」は、おのずと横広がりの姿となる。この蓮一色砂の物も、まるで目の前に蓮池が広がっているようだ。

男株と女株に軽重がなく、一株の砂物を左右に分け広げたように立てられている。両株の正真、胴、前置の景色を変えることで、自然な景色の繋がりを見せている。

2つの株を1つに合わせた姿を想像してみてほしい。正真から前置にかけての景色に何の不自然さも感じない。

脇役的な存在だが、両株の間の後方に見える巻葉が、この砂の物の要のように感じる。



「八十七神仙巻」の元絵は呉道玄（初名：道子）作と伝わる。道教の神仙たちが３人の皇帝と共に天上界を歩む。徐悲鴻記念館蔵
出典①：澎湃新聞 https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_2051721　②～⑥：澄境芸術 http://www.cjxysw.com/pdjsp?id=40

唐王朝の挿花

仙溪

呉道玄（生没年不詳）は8世紀、唐の玄宗皇帝に仕えた画家で、その天才的な筆致には神が宿ると評された。宮殿、寺院、道観などの壁画は現存しないが、彼の作と伝わる絵から唐王朝における花の文化を想像してみたい。

「八十七神仙巻」（図①～⑥）は3人の皇帝が天上の橋を仙人や神々と共に進む場面が描かれている。従者は様々な楽器や供物を手に持っているが、蓮や菊、その他の花の供花（だと思う）も多く描かれている。⑥盤に花を盛ったもの、⑤ガラス鉢に花を養ったものに加えて、③④花を挿した器を持つ姿も多く見られる。

「送子天王図」（図⑦）は仏教の絵で、釈迦牟尼仏降誕の故事が描かれている。その中に壺を持つ女性が描かれているが、壺には蓮の葉ほか（蓮花？）が挿されている。

これらの挿花が何のためのものか断定はできないが、唐の玄宗皇帝の時代（712～756年）、すでに挿花は行われていたと想像できる。少し遡ると武則天の時代（690～705年）がある。女帝のもとで花の文化が花開いたか。

日本人が憧れ持ち帰った唐の文化。その中に供花であれ何であれ、花を挿す文化もあったのかもしれない。

「送子天王図」の元絵も呉道玄作と伝わる。
大阪市立美術館蔵　出典⑦：鳳凰新聞 https://guoxue.ifeng.com/c/88KWa1cVrZk

ある不思議

健一郎

エコーで確認していた頃は3ミリだった息子の柊介が7ヶ月が経過し、6kgを超えるようになった。本当に大きくなった。

グループホームでの利用者さん達は体重の増加はあれど、ここまで大きくなることはない。私がグループホームの生活の中でかける言葉のうちに、いてくれてありがとう、生まれてきてくれてありがとう。といった類の言葉は日常的に口にしていたのだが、子供に対して、この類の気持ちをもちながら「どうやって大きくなったんや？」という言葉が口から出たのが新鮮で幸せな気持ちになった。彼に残されているであろう時間と、大きくなるであろう心身の事を思えることは、私にとって新しい体験である。

自分の子供が生まれる前に想像していたほど、子供に対して特別な気持ちを持つわけではなかったことにも驚いた。子の誕生は静かに暖かく豊かである。似かよった感覚をグループホームで人と関わりをもち、生活することで気がついた。そして、マンチェスターで植物の命について考えるきっかけがあったことも、大きく影響しているだろう。子の誕生も同じように特別だと感じた。だが、大きくなる事への驚きは子育てならではだろう。

かくいう私も大きくなった1人である。幼年の頃は幾度となく人に会うたびに「背伸びたね」「また大きくなったな」と声をかけられたものだが頭の中で子供が大きくなることは知っているはずなのに、当たり前のことに対してなぜ驚くのだろうと不思議に思っていた事があった。「ちっちゃなってたまるか！」と言い返すことを隣で勧めていた祖父を思い出す。

子に恵まれてから「ある」という事に対して不思議な気持ちを持つことが増えた。物があるとはどういうことなのだろうか。絶対的な1が存在するのかという問いが立った。調べてみると目に見えるものは様々なものが関係しあってできているらしい。それを分解し、細かくみていくと、原子や分子といったナノサイズ（1メートルの10億分の1）あるいはそれよりも小さな世界の話になるそうだ。もちろん肉眼で確認することは叶わない。

今、結論とされているものから述べると、絶対的な個といえるものは存在しないらしい。すべてのものが何か別のものへの対応だけで成り立っているという。電子が一切の相互作用をしていない時、その電子には物理的属性がない。位置もなければ速度もないのだ。明確な属性を持つ互いに独立した実態ではなく、他との関係においてのみ、さらには相互作用した時にはじめて属性や特徴を持つ存在となる。つまり実態とは永続的なものではなく、その場の環境によって姿形を変える束の間の出来事なのである。全ては相互作用で実態というものがあるように見えているだけだということだ。

物事が物事に作用を及ぼす。例としては、狼が人の脅威である↓人が狼を根絶させる↓鹿が増える↓鹿が草を食べる。↓森林が荒廃する↓人が狼を再導入。以上のようなことも相互作用していたんだなと再認識させられるような例だ。まあ、大風が吹けば桶屋が儲かるようなものである。多様性の上でお互いに影響を与え合いながら実在が保たれているようにみえ、関係が発生しなければそこには在ることができない。そこには、その時々に在るという奇跡の瞬間がある。

食べる、食べられる関係は一見、弱肉強食のヒエラルキーのように見える。だが、同じ生存空間を分かち合い、互いに他の種の数を調整しながら、共存する関係を結び合っているのだ。結果的に一種類の生物がその場を独占するよりもはるかに多くの生物量が存在でき、より多くの種類が、物質とエネルギーの循環も促進され自然の円環が保たれるらしい。

物が存在し続けると勘違いしてしまった生物は、物が無くなった際に不思議に思う。柊介は手に持っていたものがなくなるとそれを切なげに見つめて不満そうな顔をする。少し前までは目の前からおもちゃが無くなることもそのまま受け入れていた。子が大人になるのは思っているより早いのかもしれない。

お花が枯れるということを知っている人はそれを不思議に思わない。そういうものだと知っている。枯れると実がなることを知っている。人は人の一生の時間を軸に、時間について考える。切花の寿命は数日である。そこに人自身の生涯の縮図を投影し、ある事の奇跡を確かめ、散ることを不思議だと思わなくしようとしたのではないだろうか。人が切花を楽しむようになるより遙か昔、ヒトが弱肉強食の中にいた時に感じていた、生きている奇跡をである。

自身が偶然に今、姿形としてあるように思えるだけで、無いという状態を当たり前の事として、受け止め、ある事を前提に生きるのと関係性の上で一時的に現れ出ていることを前提に生きるのでは大きな違いが出る。切花はその状態をよく表しているように思える。

切花は枯れる。来年にもう一度お花を咲かすことはない。土から切り離された状態である。私はこの状態が不思議な、一種の神秘的な状態でもあるように思う。

花を生けることは、人がヒトでいるために大きなきっかけを創ると考えている。

お釈迦さんは、この世にある形あるものは、この世に永遠に存在する唯一絶対的な存在のものではなく、あらゆる因縁によって生まれているという事も唱えていた。

在る事は無いことにできない。無いものとして考えた時点でそれは在る。たまたまの偶然を楽しみ、そこでは良い、悪いは大きな問題ではない。日々、奇跡の瞬間を生きている。

アーティチョーク

〈表紙の花〉　櫻子

グラジオラス（菖蒲科）
アーティチョーク（菊科）
瑠璃玉薊（菊科）
金彩ガラス花器
（ウルリカ作）

アーティチョークは古くから栽培され、古代のエジプト、ギリシャ、ローマ時代にすでに食用や薬用として利用されていた。

モロッコでいけばな展のため花材採集した時も野生のアーティチョークが沢山道沿いに生えていたが葉先や茎、苞にチクチクする小さなトゲがあり、とても手こずったのを覚えている。切ってすぐ水揚げしても萎れてしまい短くしないと生けられなかった。

そんな事を思い出しながら、花屋さんで買ったアーティチョークを長く生けている。野生の強靭さは無いけれど、立ちあがる薄紫色の花が繊細で美しい。大きなタンポポのよう。同じキク科のルリタマアザミを添えて色の濃淡でグラジオラスの色を引き立てた。

レモンとメイと檜扇

「テキスト」10年分公開

「桑原専慶流いけばなテキスト」は1962年に始まって61年目になる。長きにわたる流内の皆様のご支援に厚く御礼申し上げます。

そんな蓄積を活用してもらいたくて、2012年まで50年分の花の写真と解説文をホームページに公開したのが3年前。誰でも何時でもご覧頂けます。

先々代、先代夫妻、そして現代。それぞれの花と文を見比べることもできます。月ごとにまとめてもあるので、ある季節のいけばなだけを眺めてもいただけます。

そして今回、その後の10年分も公開することにしました。年順、月順にまとめたものに加えて、仙溪、櫻子、健一郎それぞれの花と文を個別に見ることもできます。

また、「立華時勢粧を読む」の連載と、随時連載中の「器と花の痕跡」もまとめておきました。これらは自分自身が振り返るのに大変役に立っています。

流派のいけばなをまとまった形で記録に留めることができて感無量です。

これからも流派の皆さんのため発行を続けていきたいと思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。

https://kuwaharasenkei.net
→「書籍・月刊誌」
→「桑原専慶流いけばなテキスト(2013~2022年)」

桑原専慶流いけばなテキスト722号　2023年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

深山の気

＜12頁の花＞　仙溪

櫟（櫟科）
夏櫨（躑躅科）
山紫陽花（紫陽花科）
陶花器

アジサイの季節が過ぎて梅雨も明けた頃、京都では祇園祭山鉾巡行が無事に執り行われた。古から厄除けの力を持つとされる檜扇（古名：烏扇）をいけて飾るのも古都の歳時記である。

　そのあとは真夏の太陽が容赦なく照りつける。庭のムクゲも花数を減らして暑さに耐えている。床の間には清流や滝の絵を掛けて、奥山の涼風を感じたい。

　イチイの幼木に色づいたナツハゼを重ねて、その足元にまだ色の残るヤマアジサイを覗かせた。真横へ長く伸びるヤマアジサイに出逢ったことからとり合わせを考えたが、深山の気を感じる花になった。